招源

根源實紫

四

上の巻

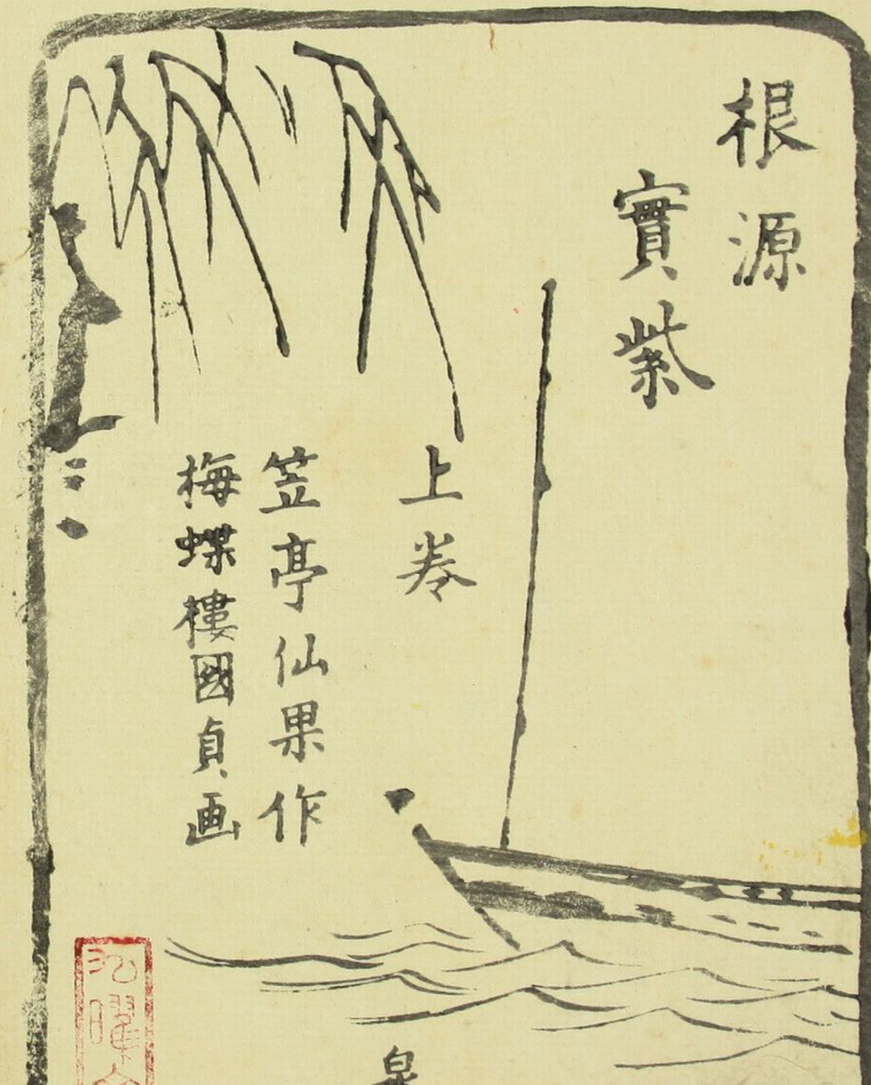
四七

根源實紫

上巻

笠亭仙果作

梅蝶樓國貞画



泉喜太板

東京市 表町 伊東

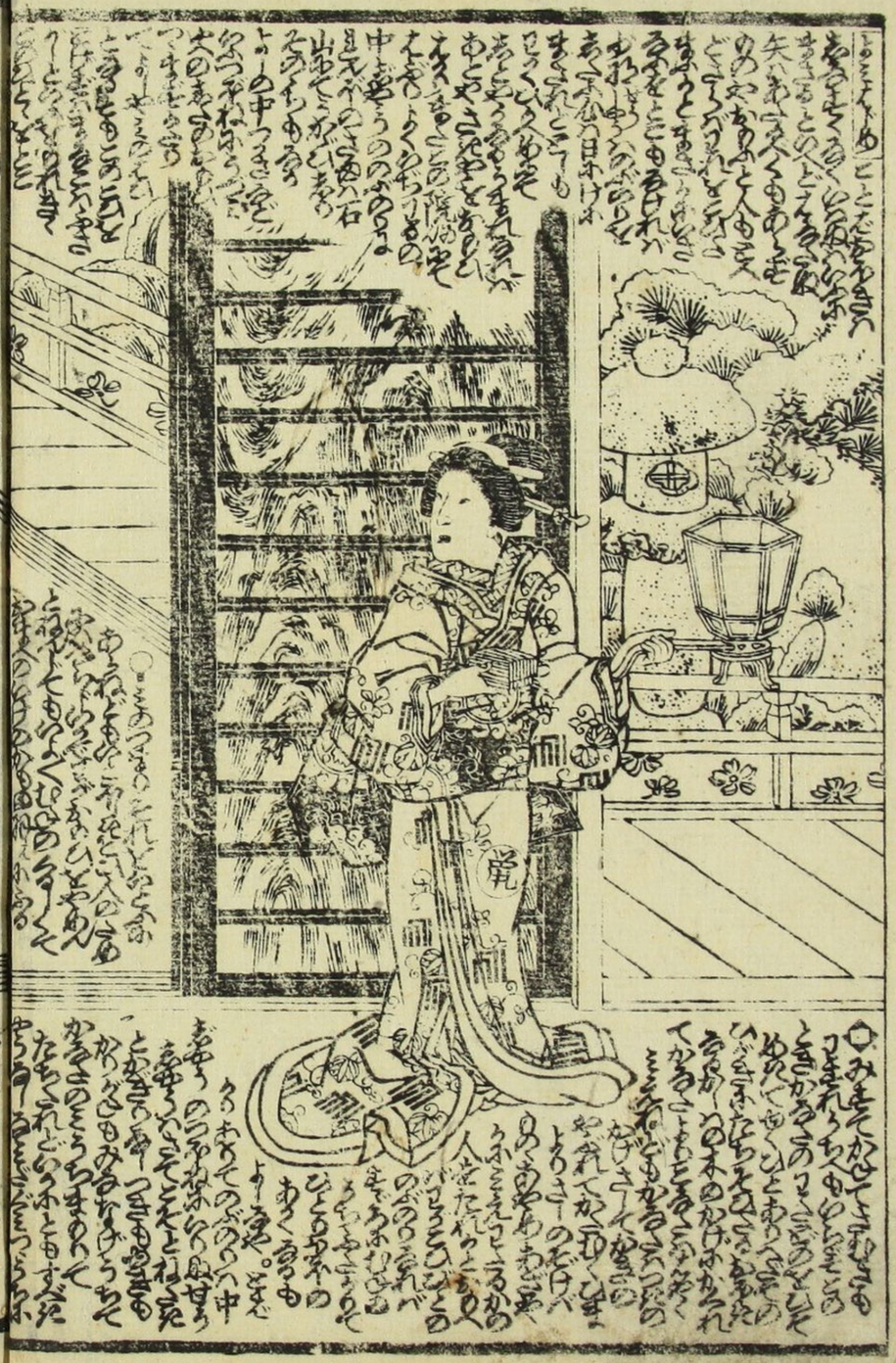
惟規が齋院の女房の許に通ひ金葉集今昔物語十訓抄等に見て木の丸殿の歌詠し話未だ著さねど新に設ける此あらぬ女房を少將の君とするは後拾遺集に惟規越後に死る期辞世の歌を齋院の少將が許につかはしたる詞書あるに因れり又めづらしくもあらぬ梁上君子を本編にも作るは齋院記に正暦三年十一月五日盗齋院に入る是に依て諸卿彼の院に參ぜたまふとあると種とし後に惟規木の丸殿の歌よむ茶の伏筍とも

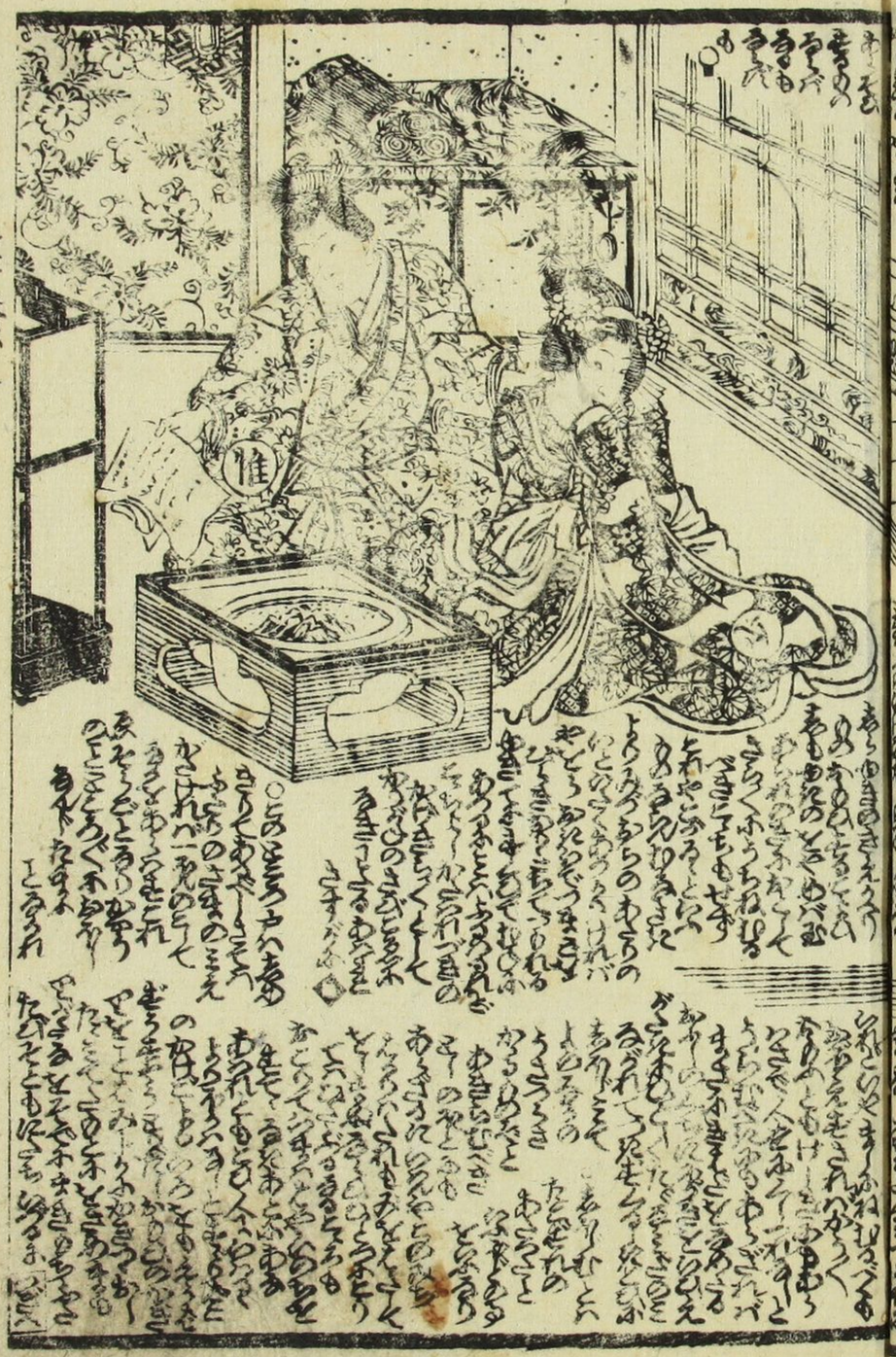
法皇圓城寺に花御覧ありしは栄花物語詞花集にも出されど年月は傳らぬから些づ本拠はあれどおれを貞仲の女とは空設に初編をかく時何故にかく定めしか忘果つ上件の茶々もかうざるに記憶なくなりもぞしると幼童たちに告ぞら巻首にしるして備忘とし

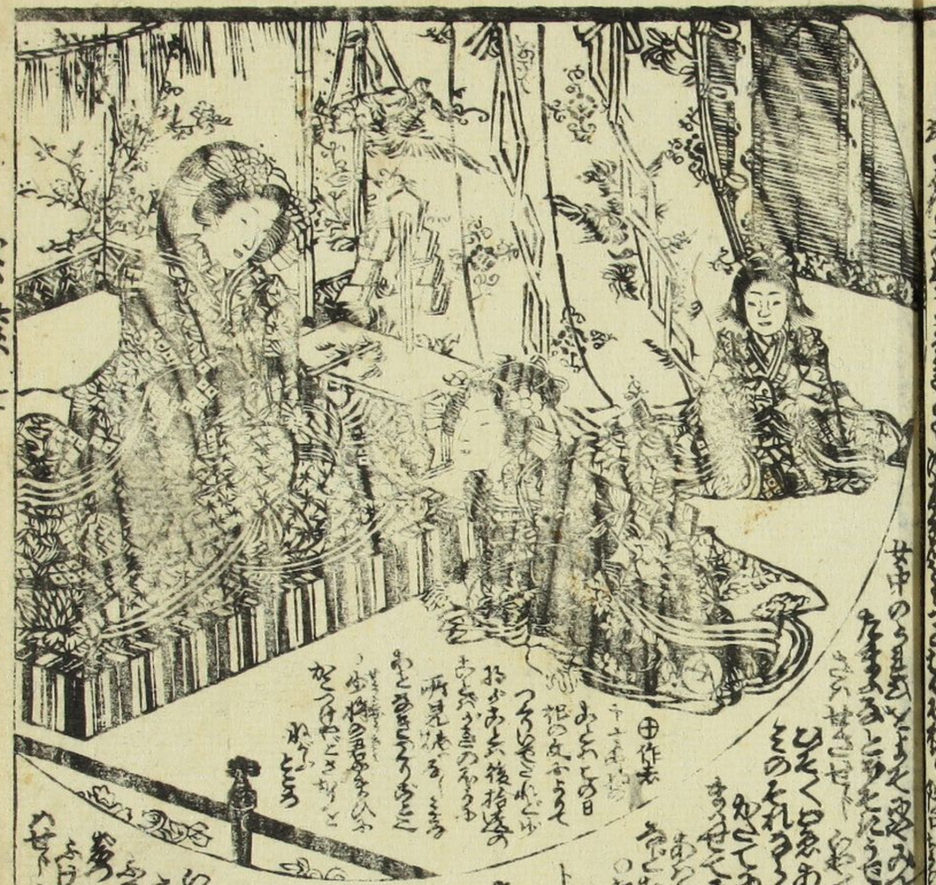
乙卯春新刊

笠亭仙果

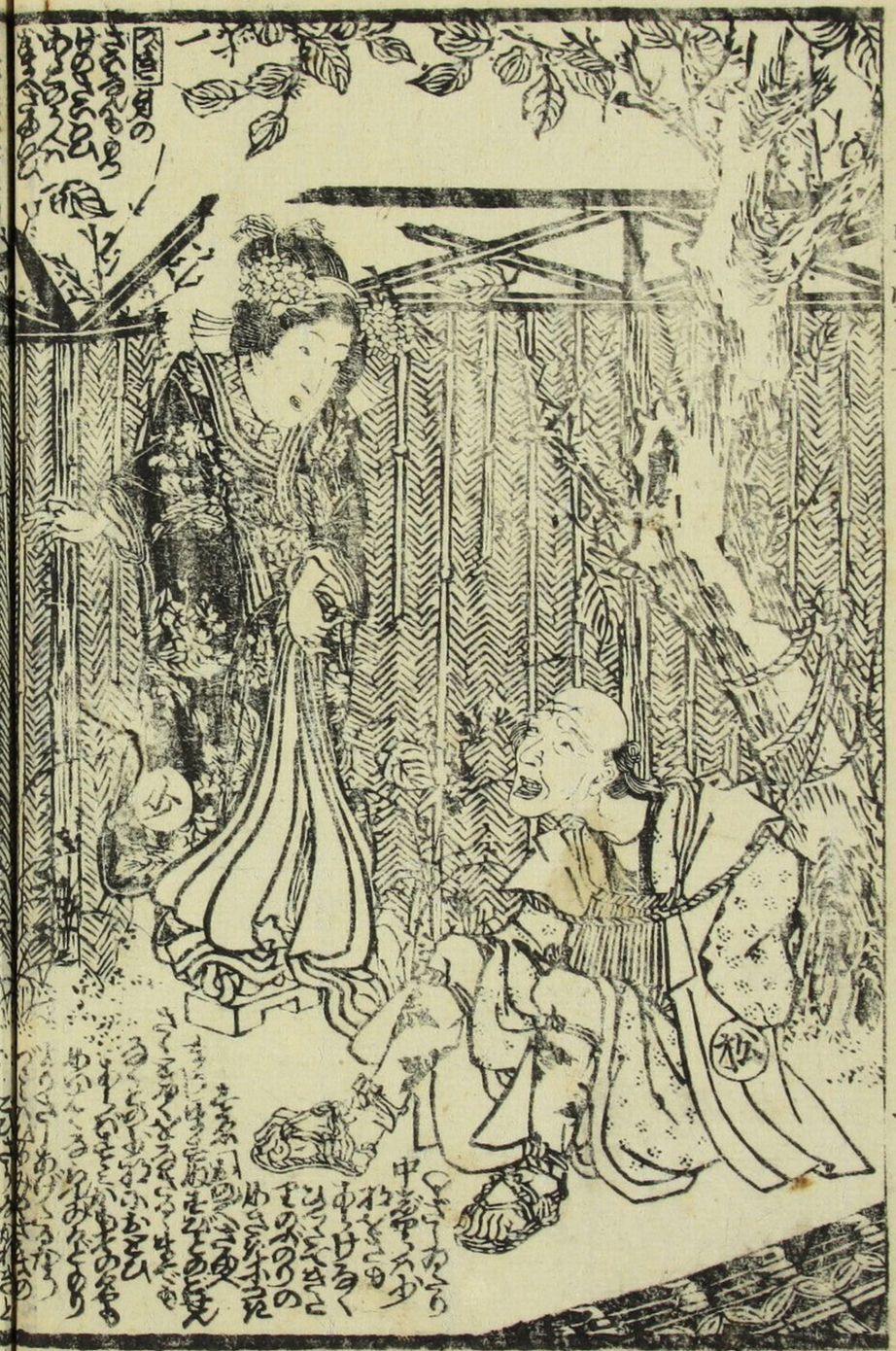
曲亭馬琴

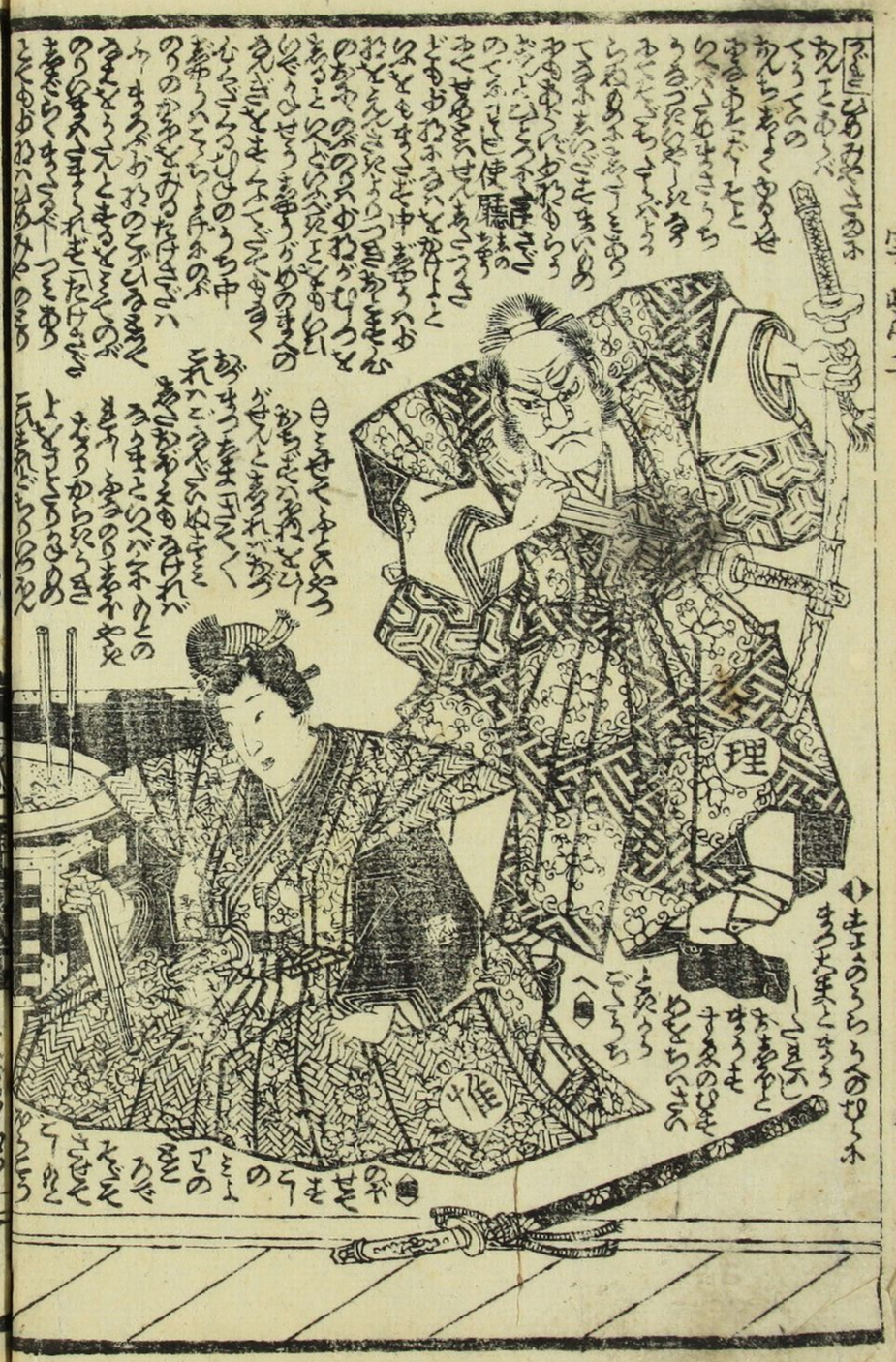


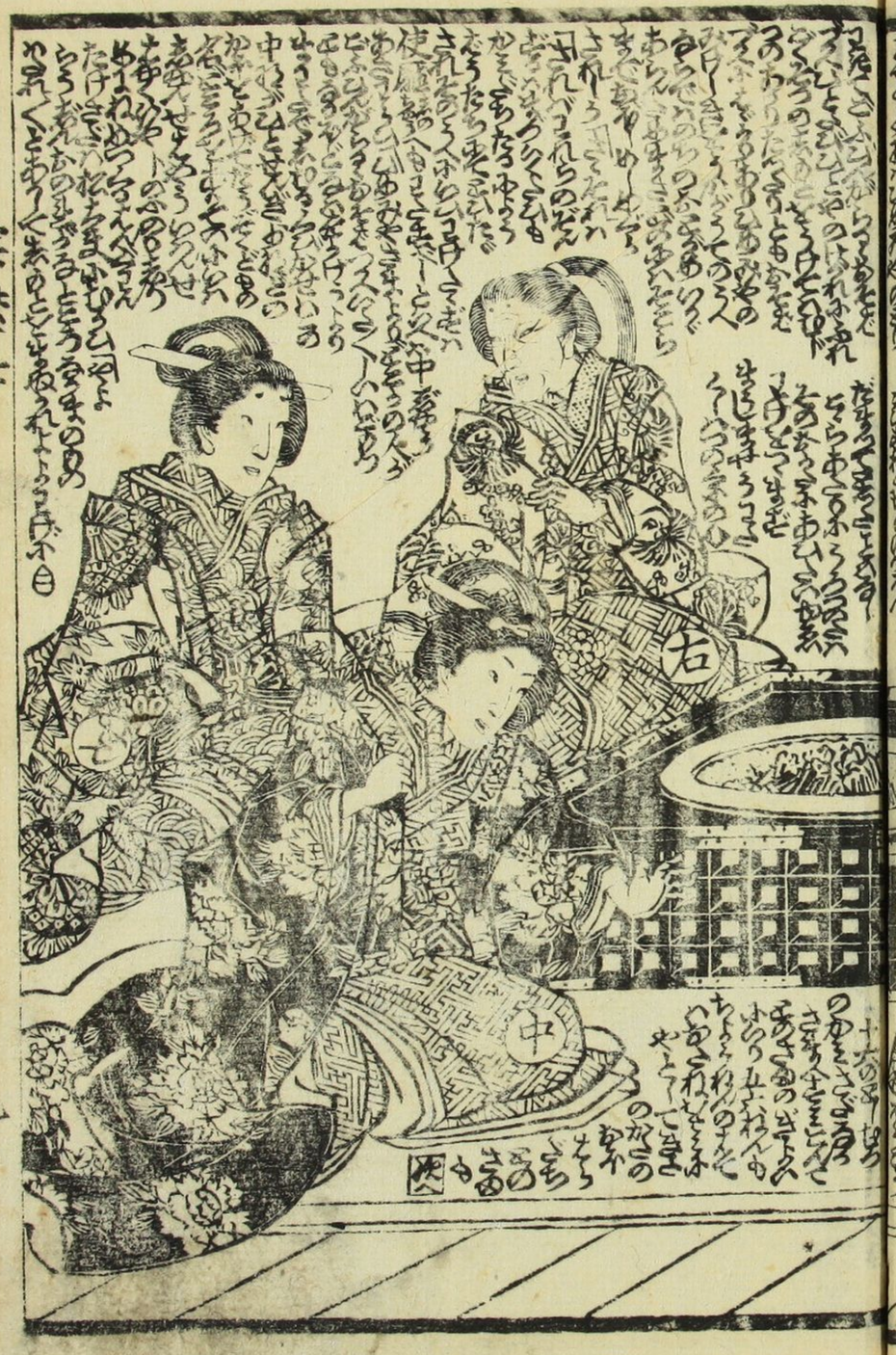




松

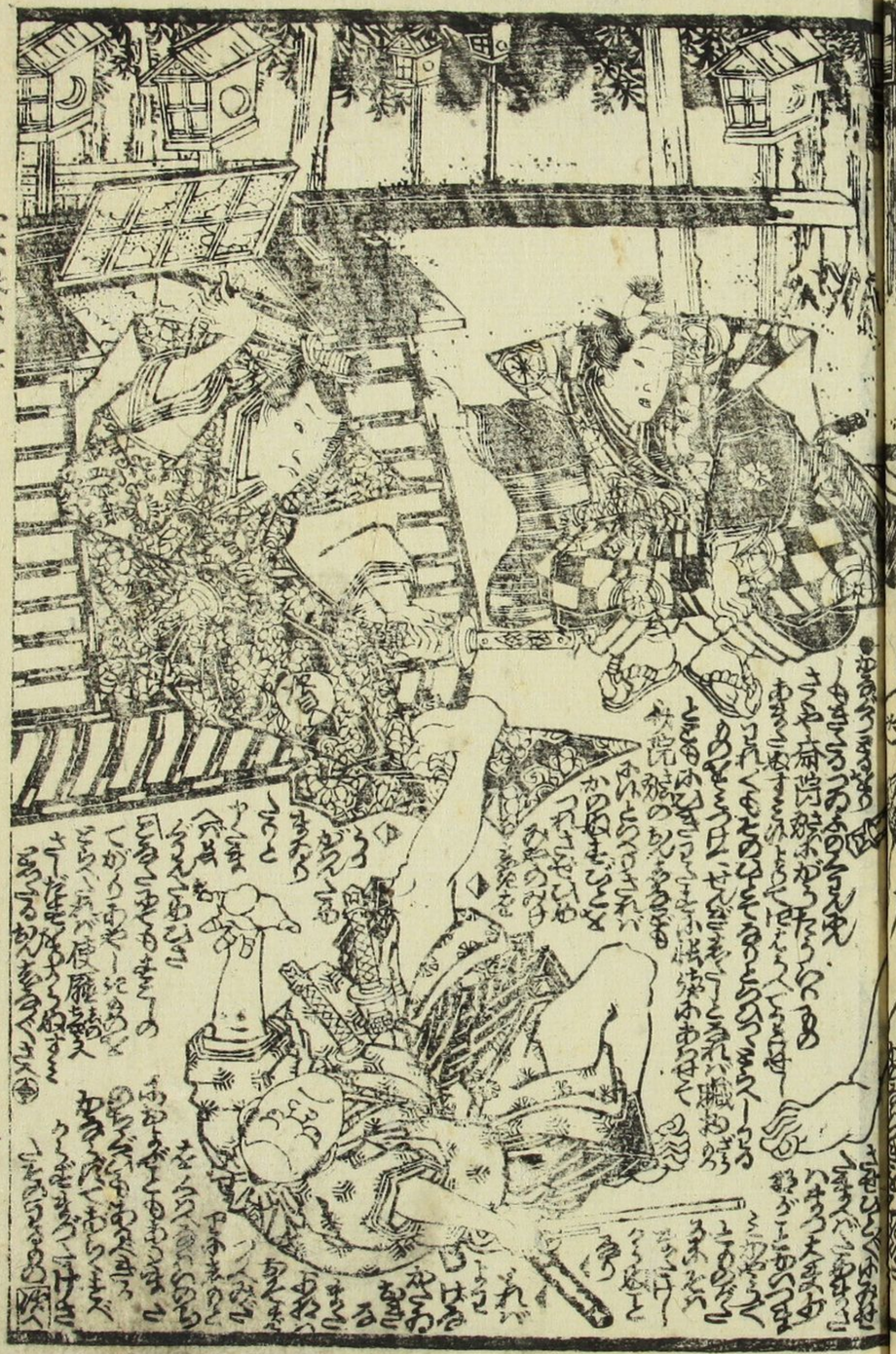

松

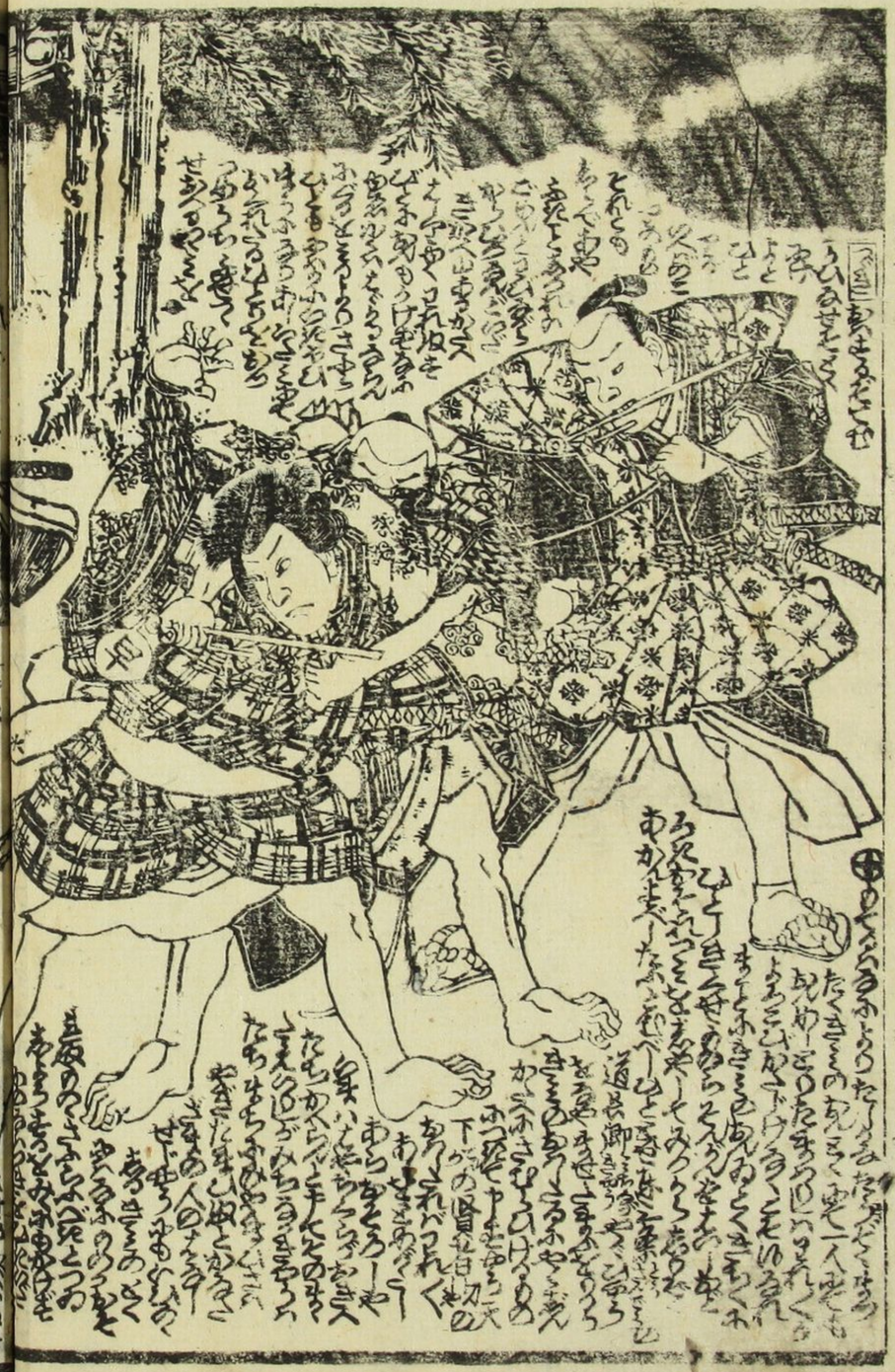

理
惟

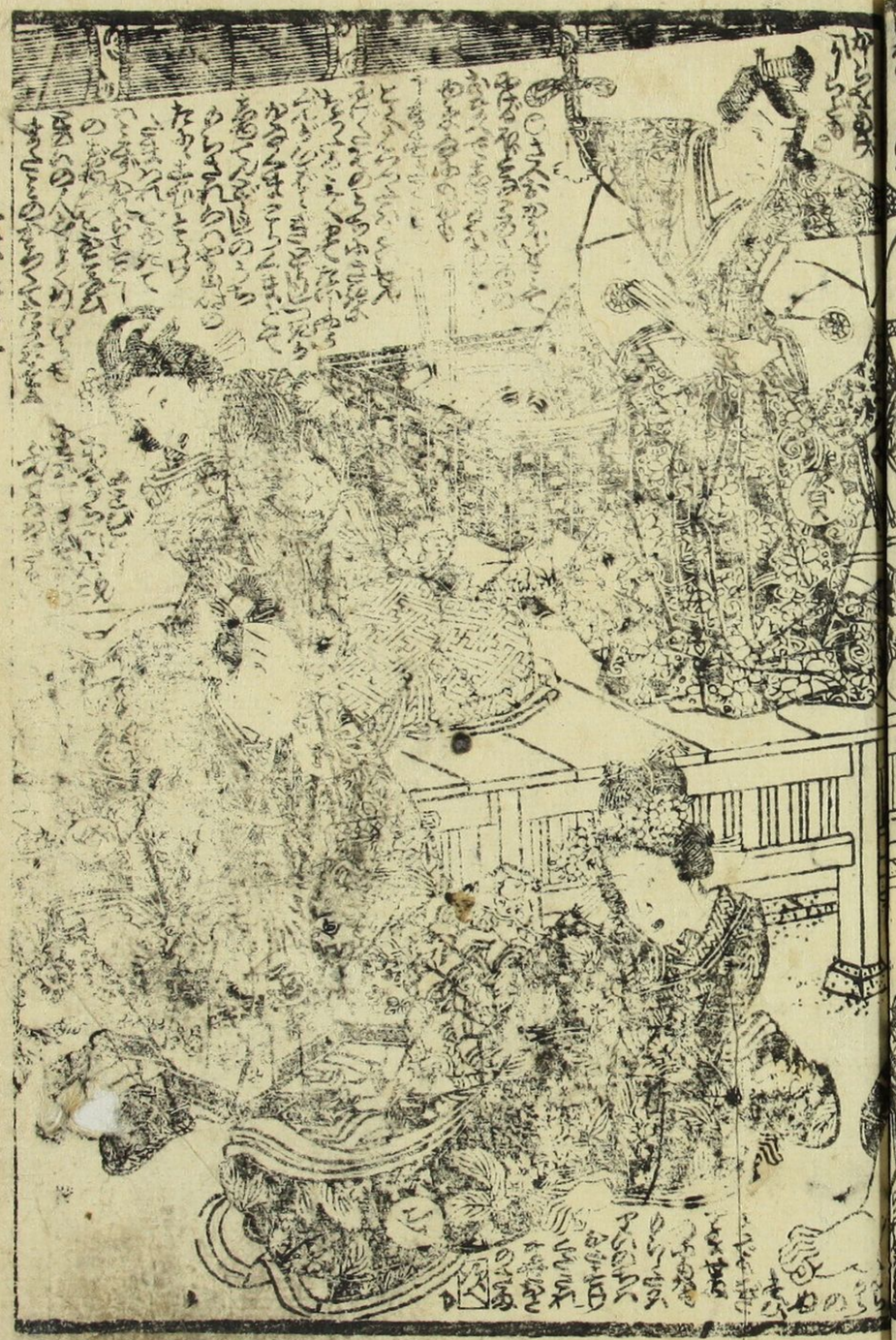

右
中

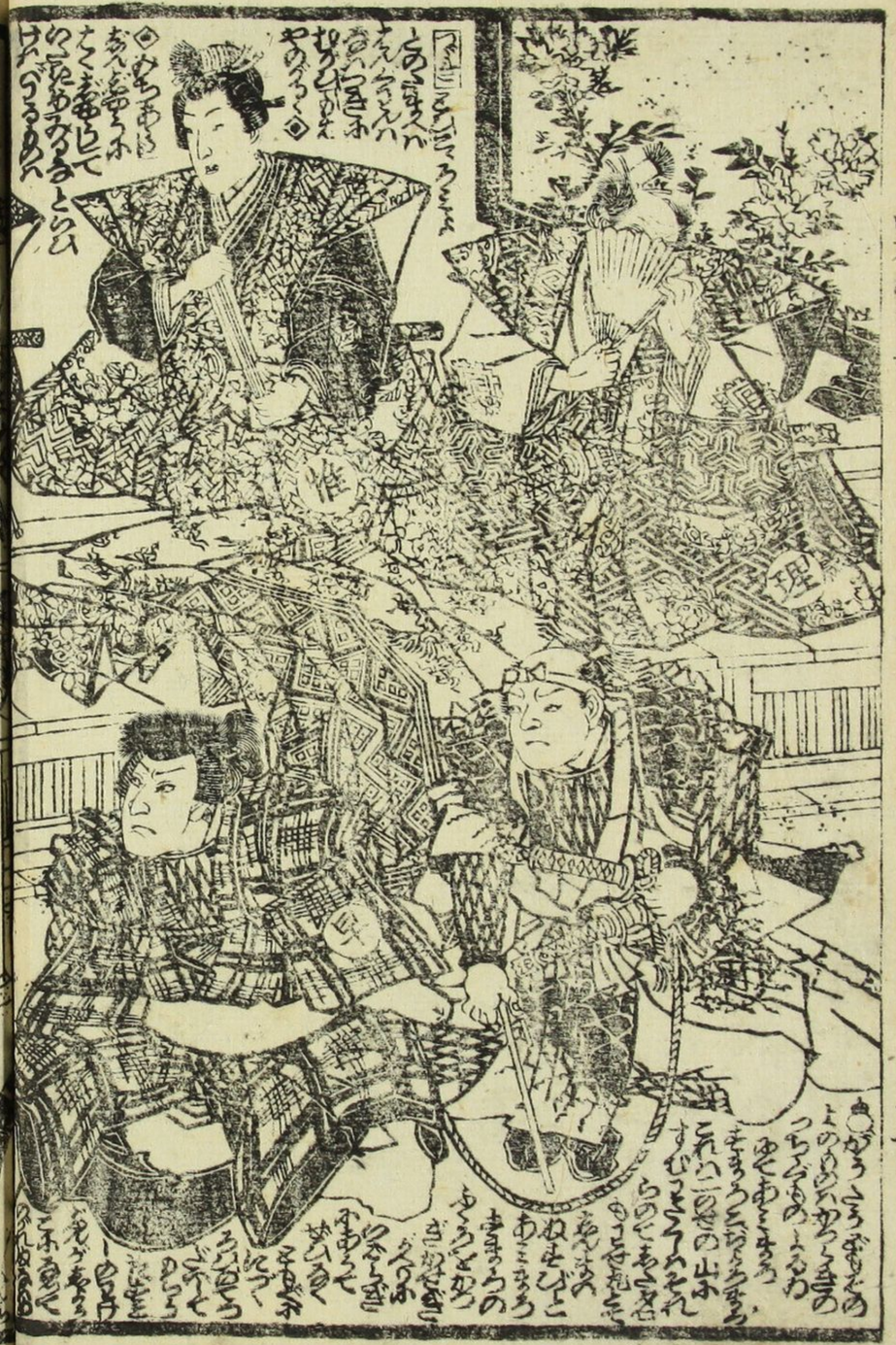
松

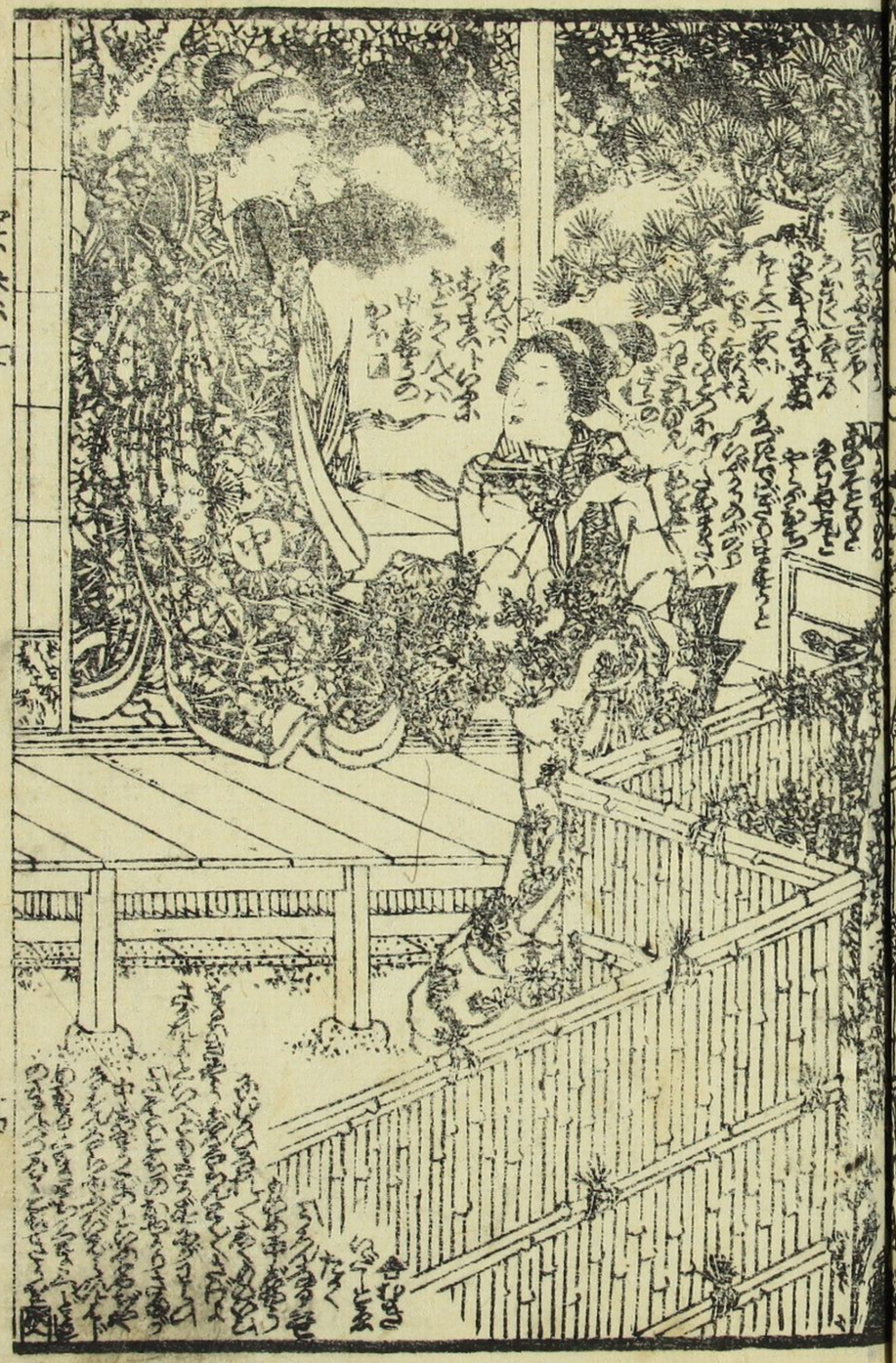
仙果作國貞画

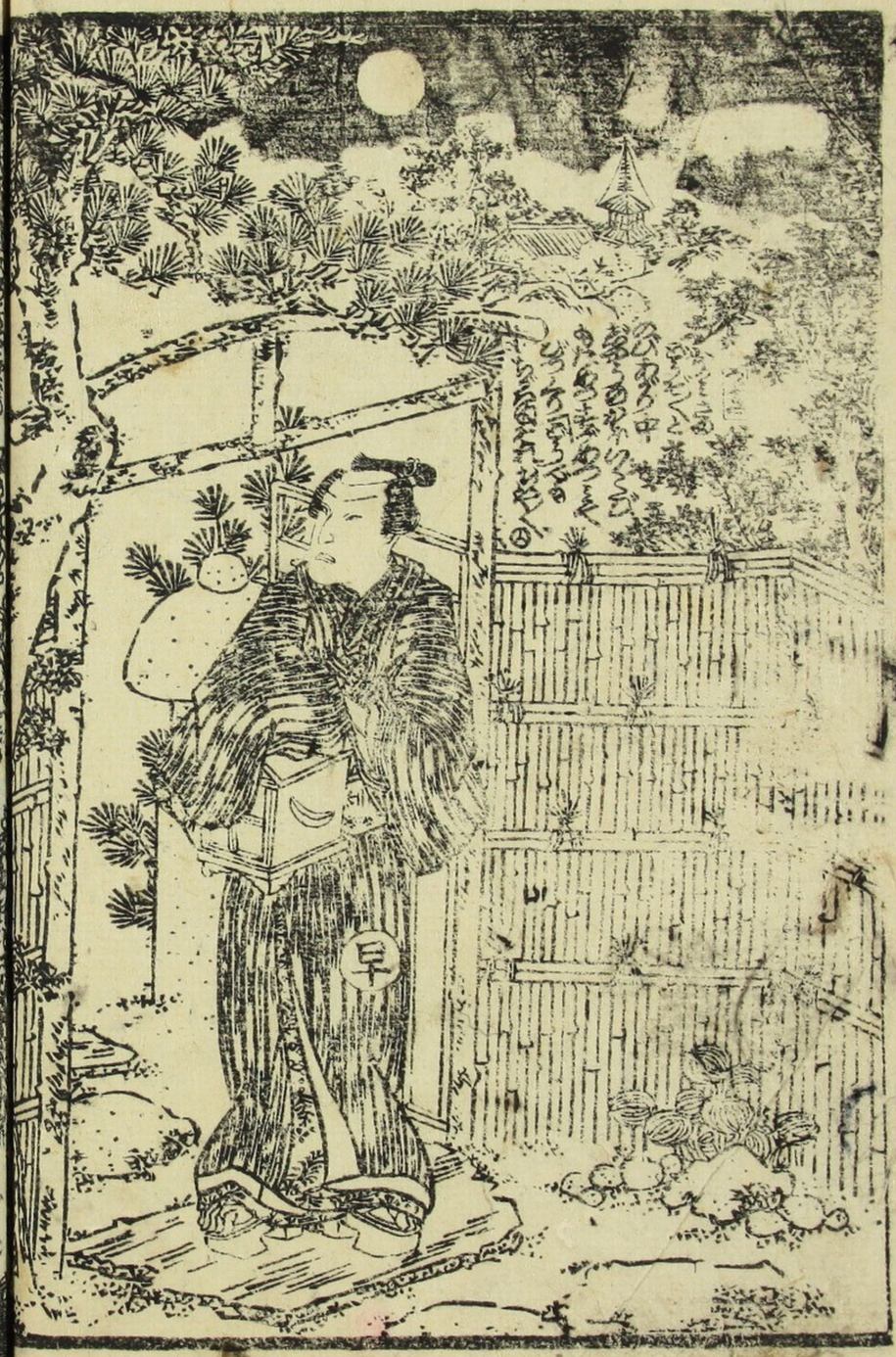


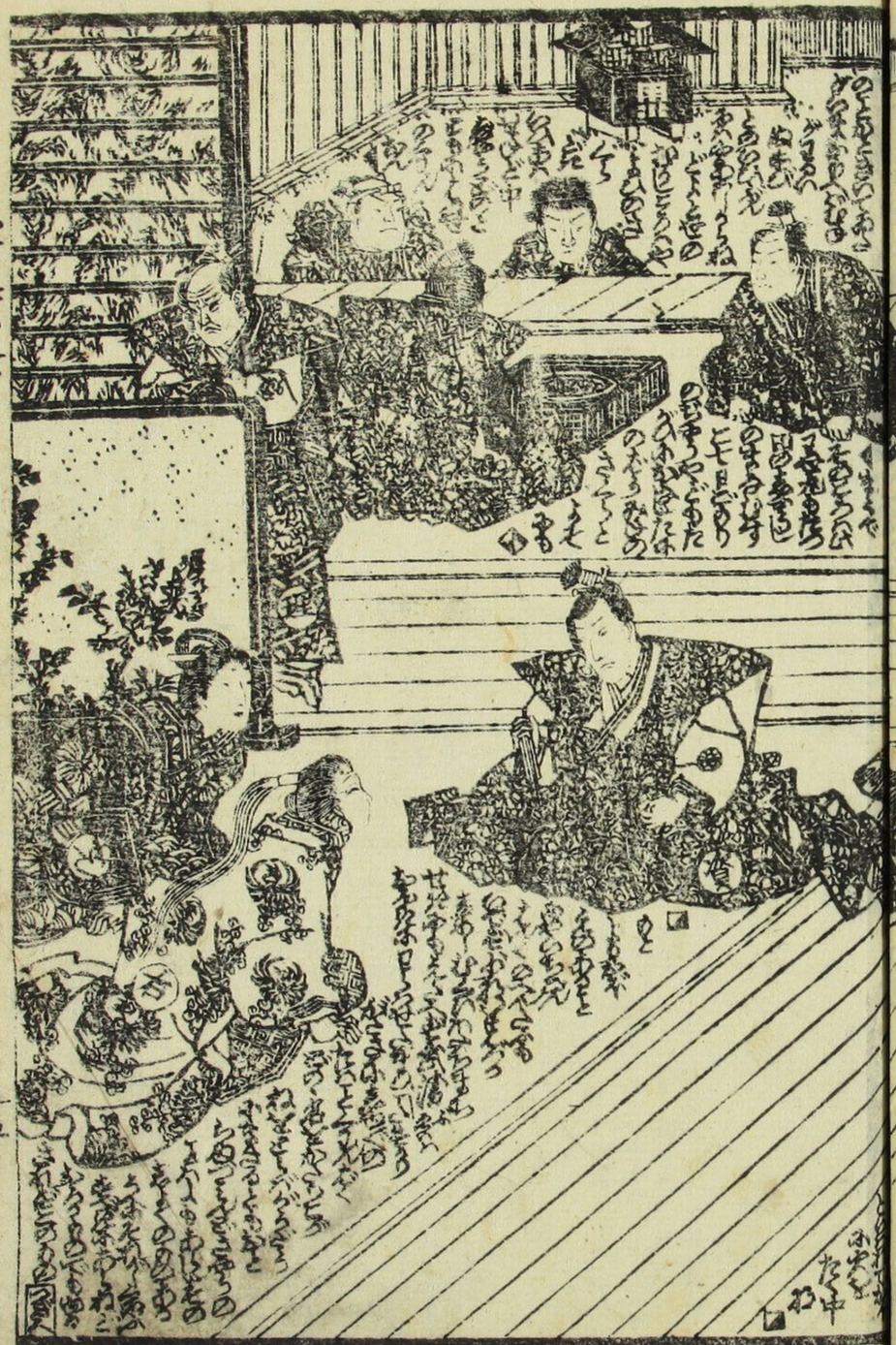


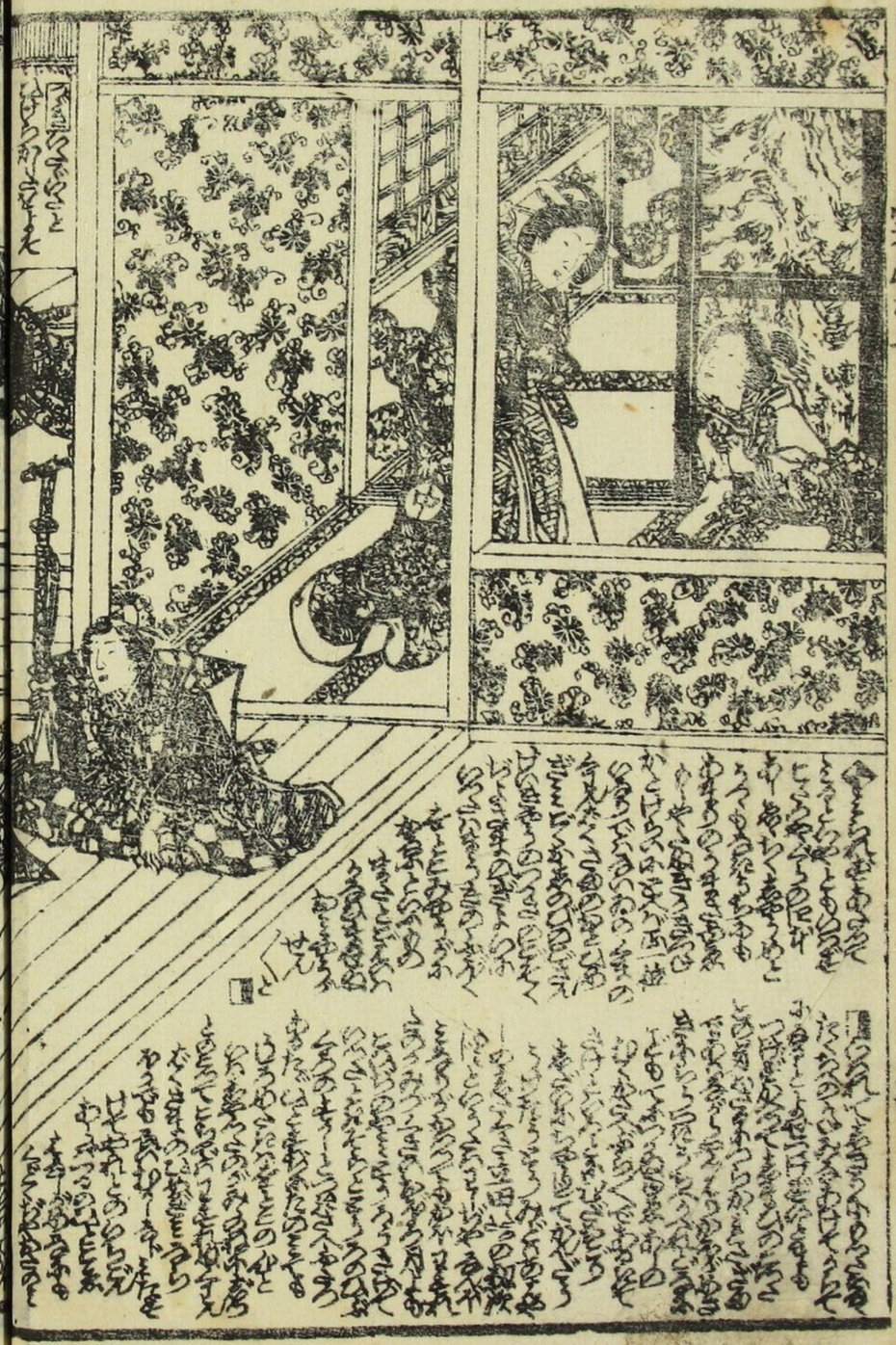


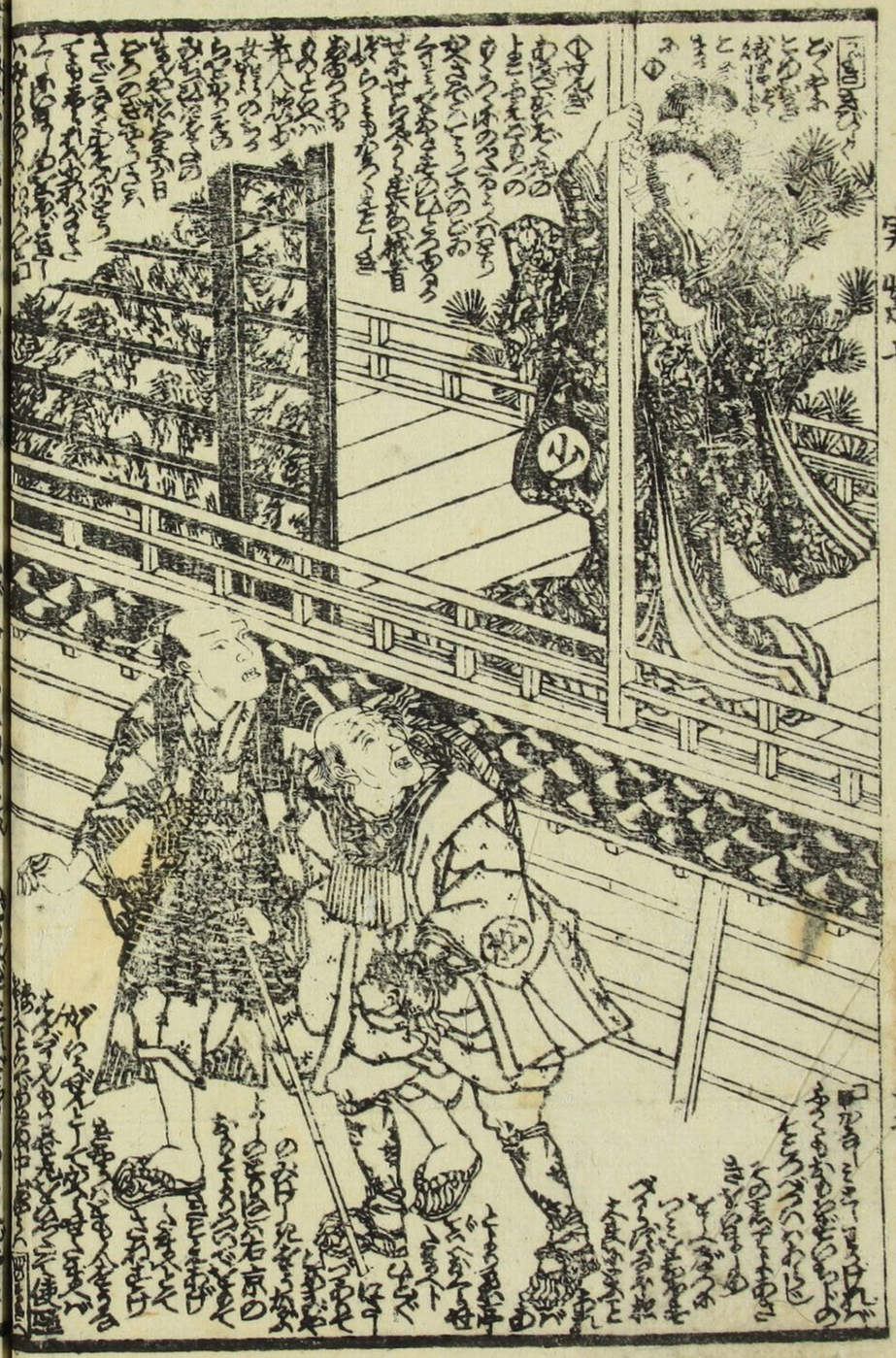


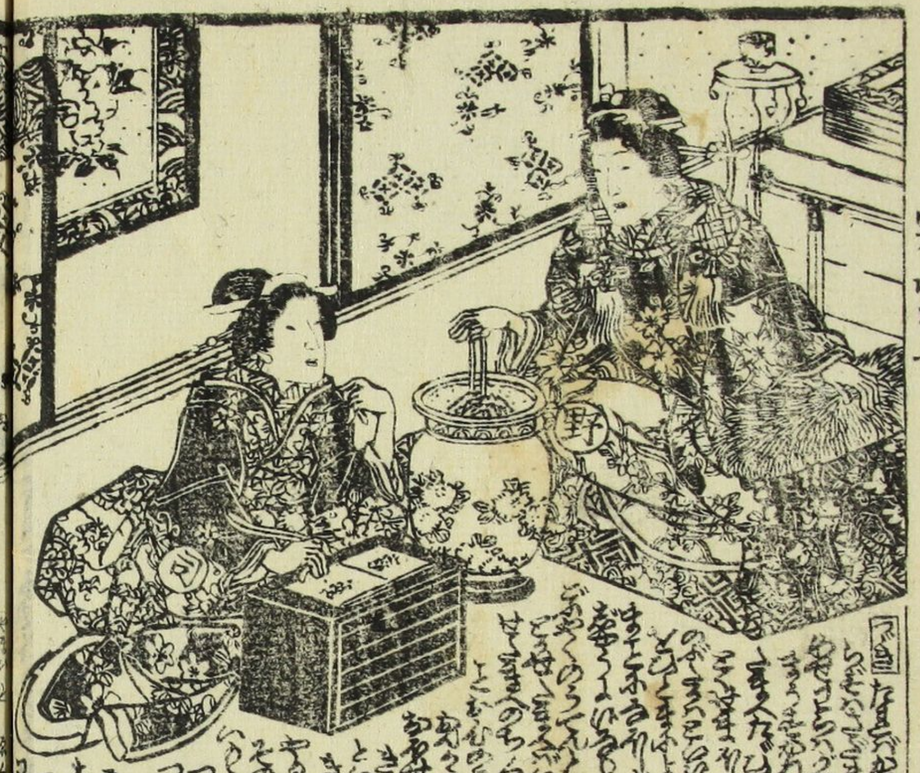






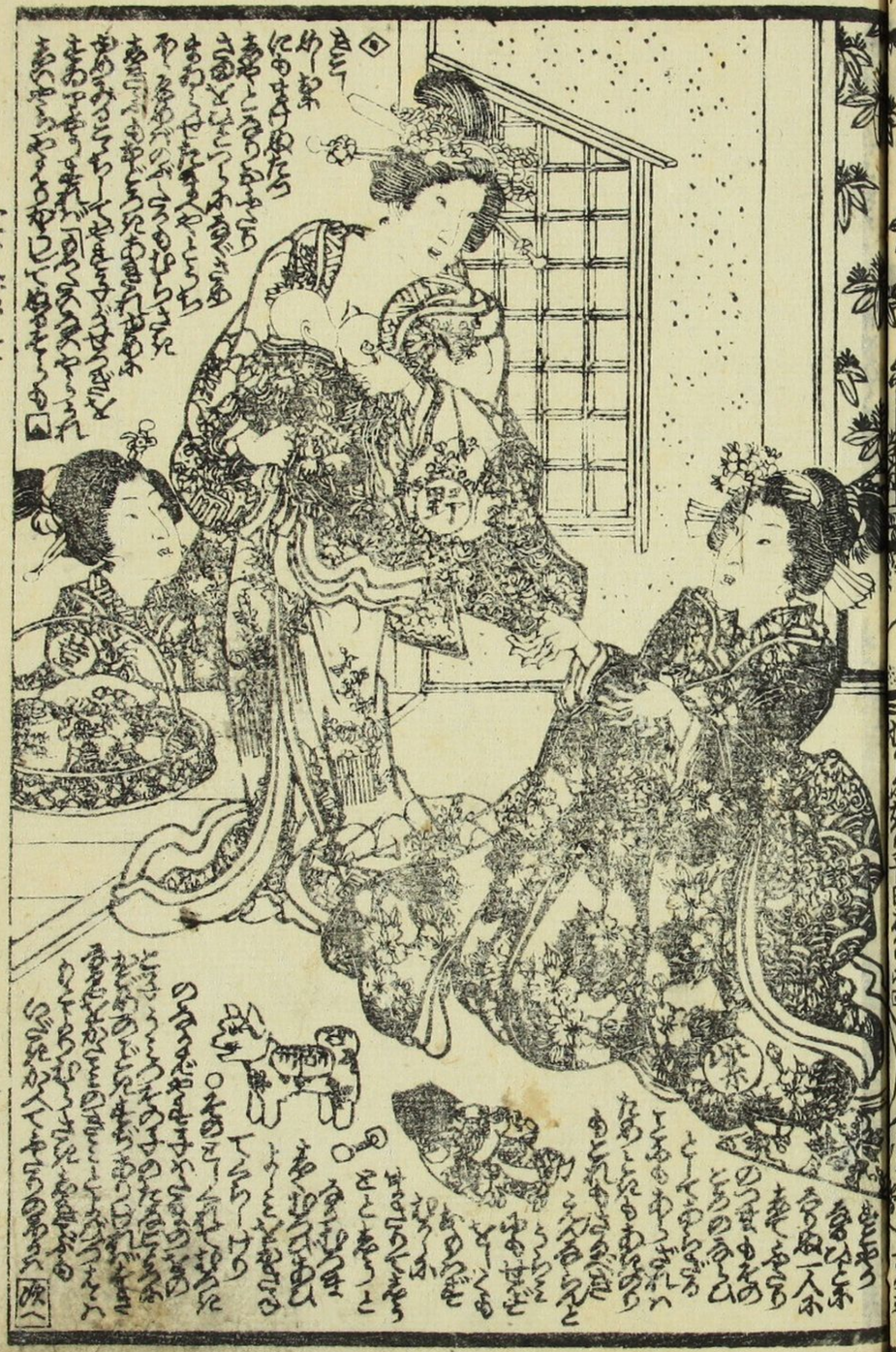


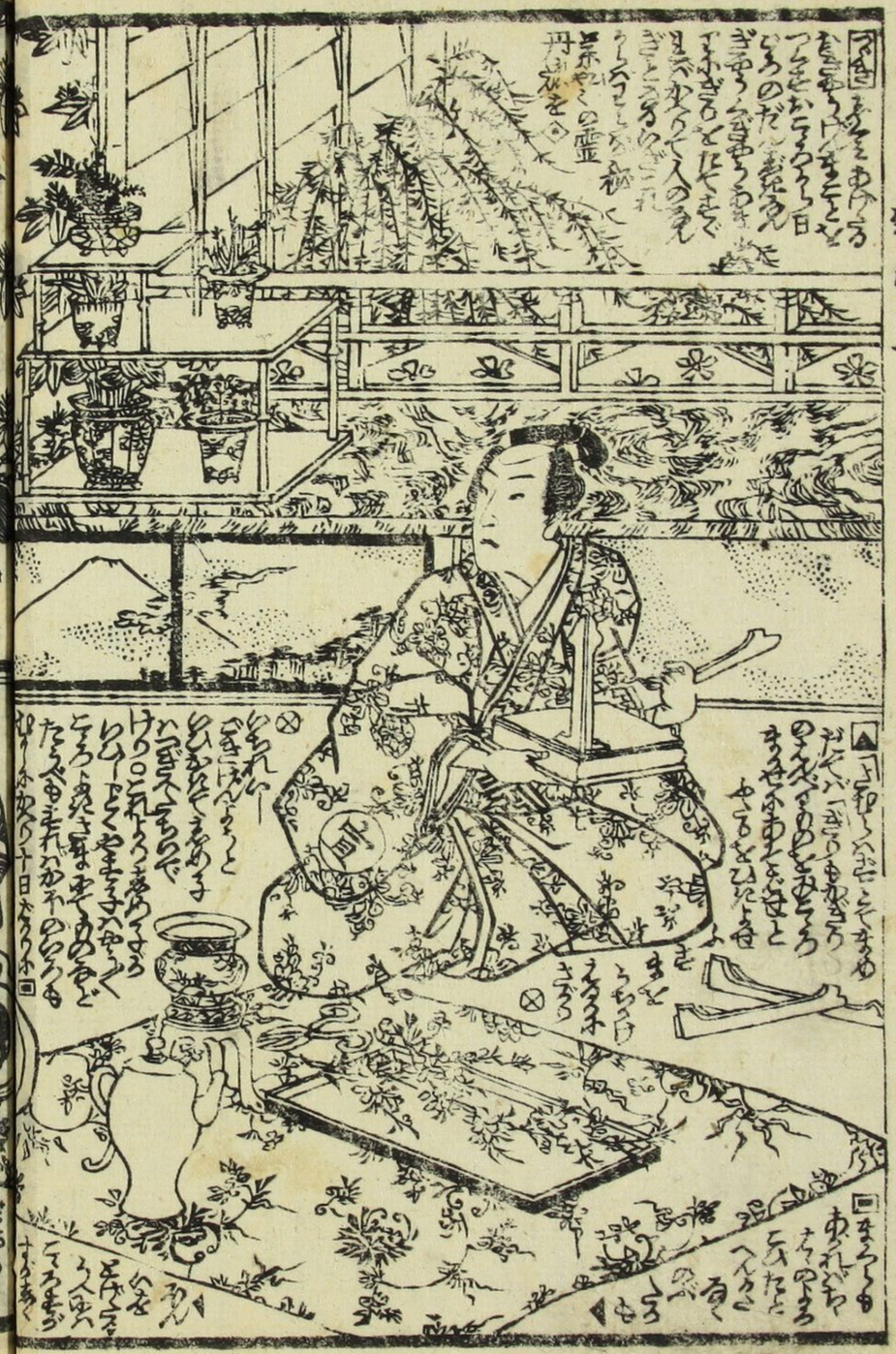




宣

司

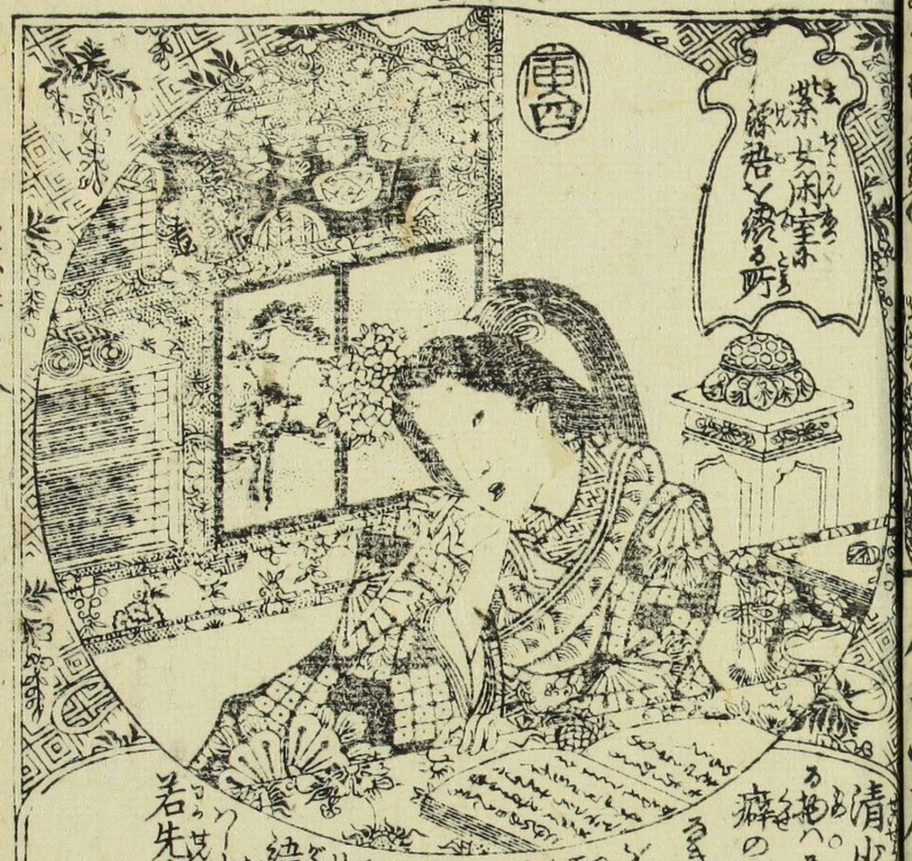




笠亭仙果作

梅蝶樓國貞画

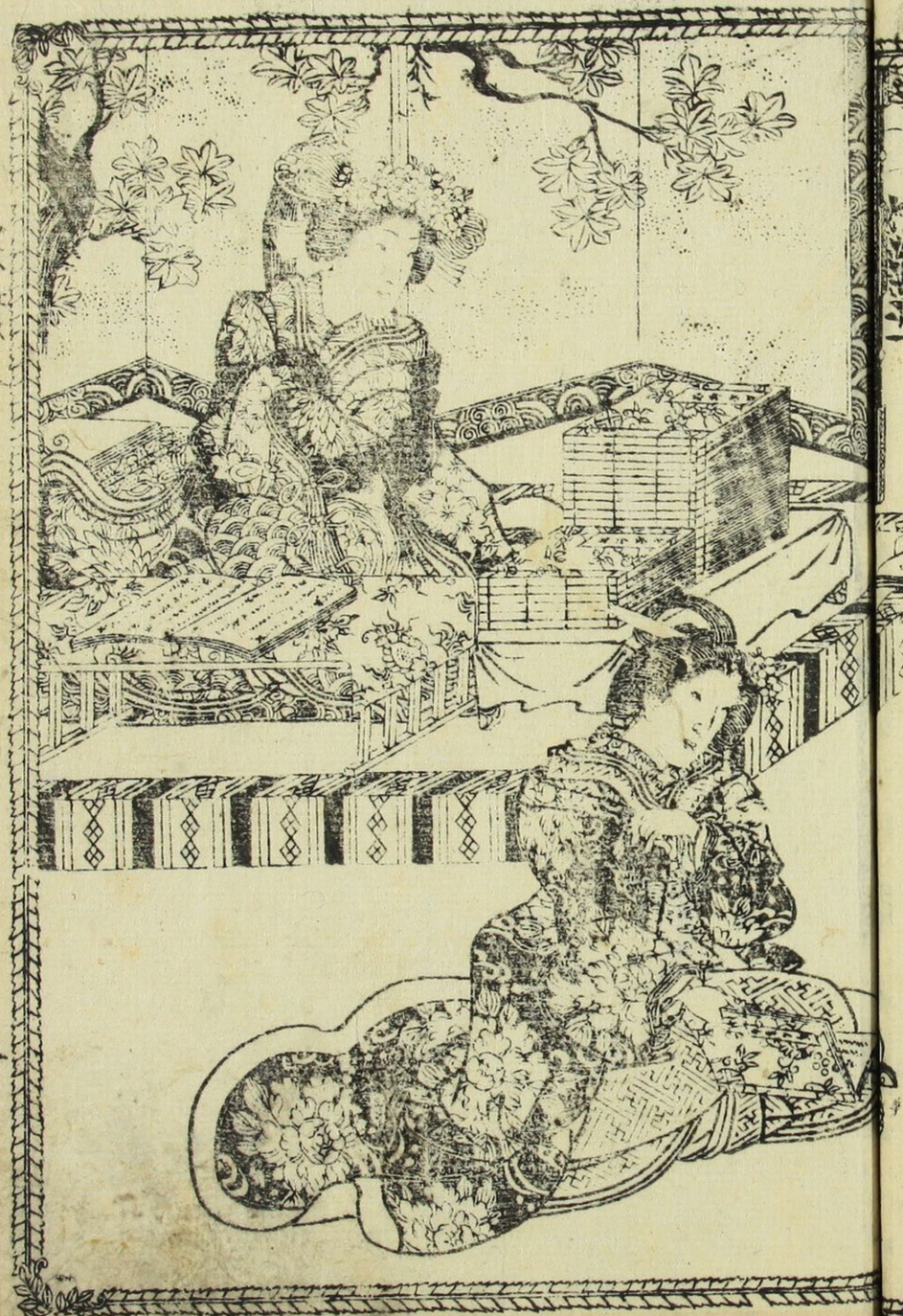
淨書 金川

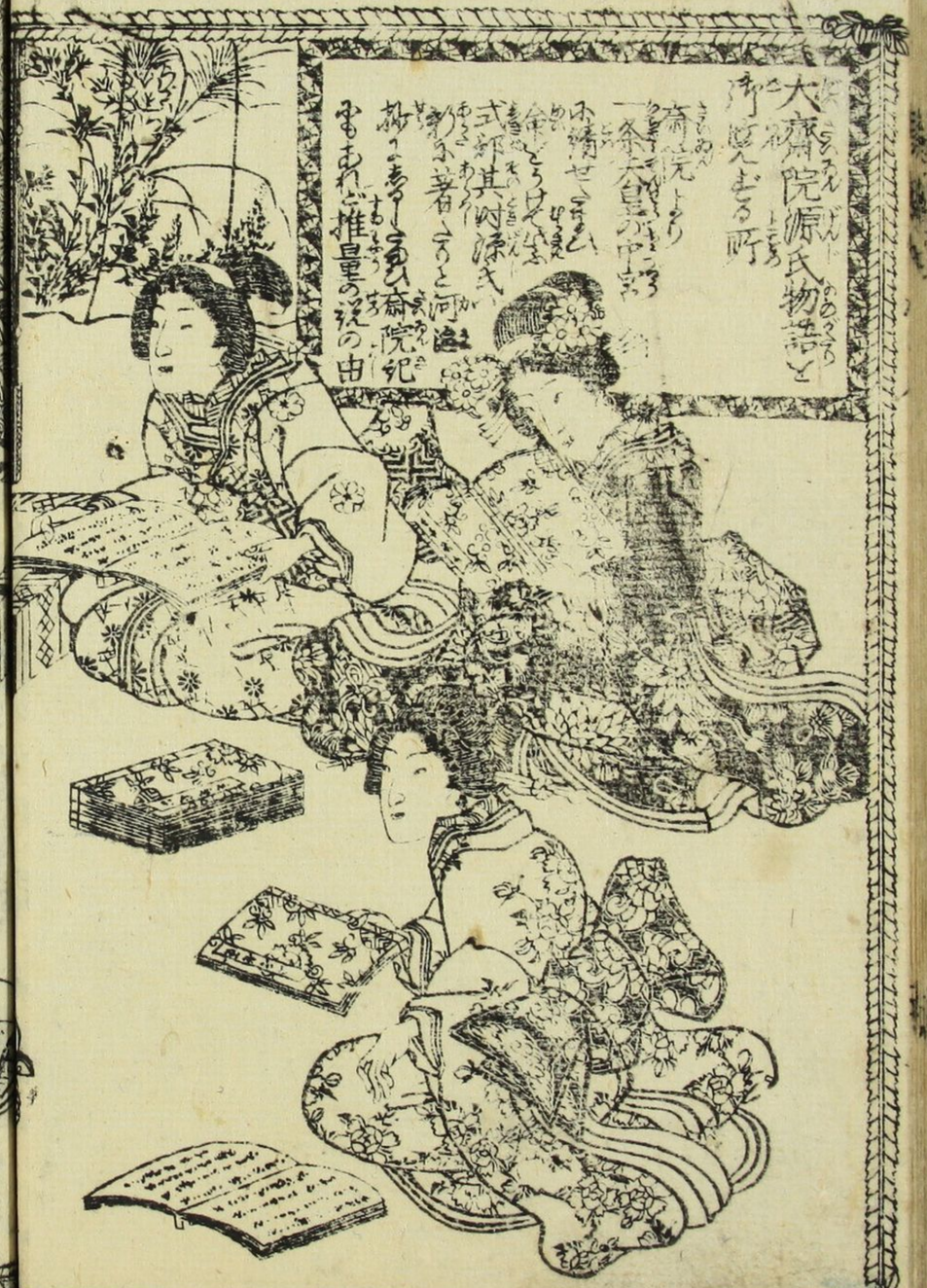


紫女閑室に繰る所

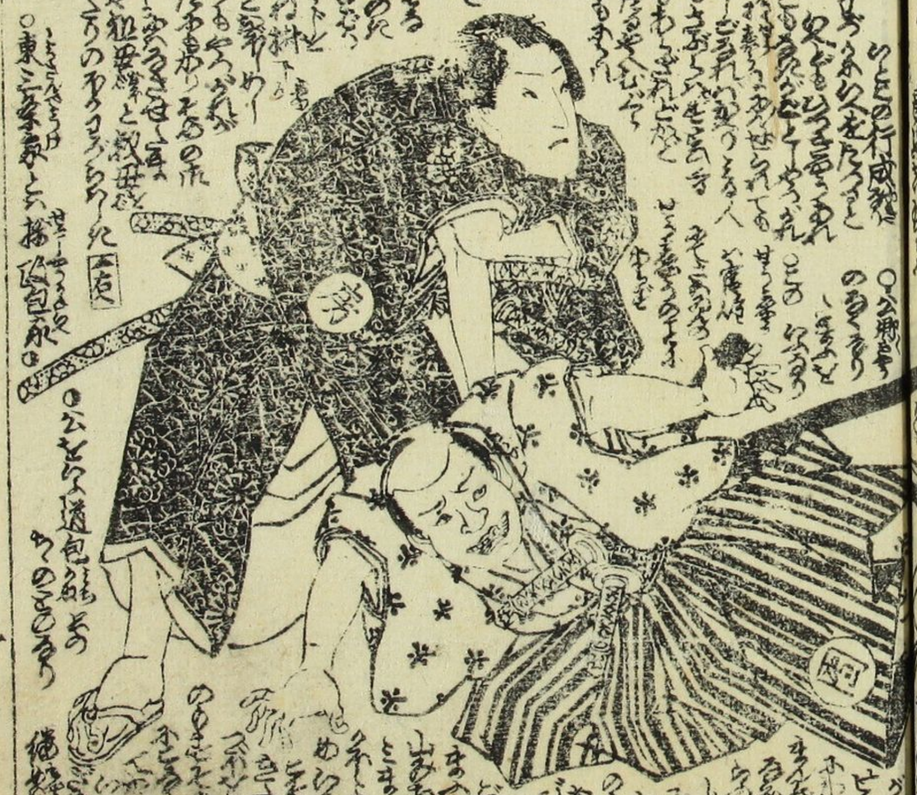
清少納言が枕に付に繪にかゝれ劣る
枕へ。あでしとさてら。山吹云くと有
癖の為に色色に取ゆくき如く奇怪
なき譚話はまつぶに因る。紫式部
と看板に掲其傳は稀にして前太
平記の翻案にして段の多かるも
世故にて代人の婦徳才幹十
が一も形容しがたれにしれり書
劣にこゝろにはに非ず本編まで
其人の談話に及ばねば源氏抱
絡珍重せられる趣を口画にあら
ひし小野小町も業平も画かとりせぬ
若先生の筆を労して図を補ふ

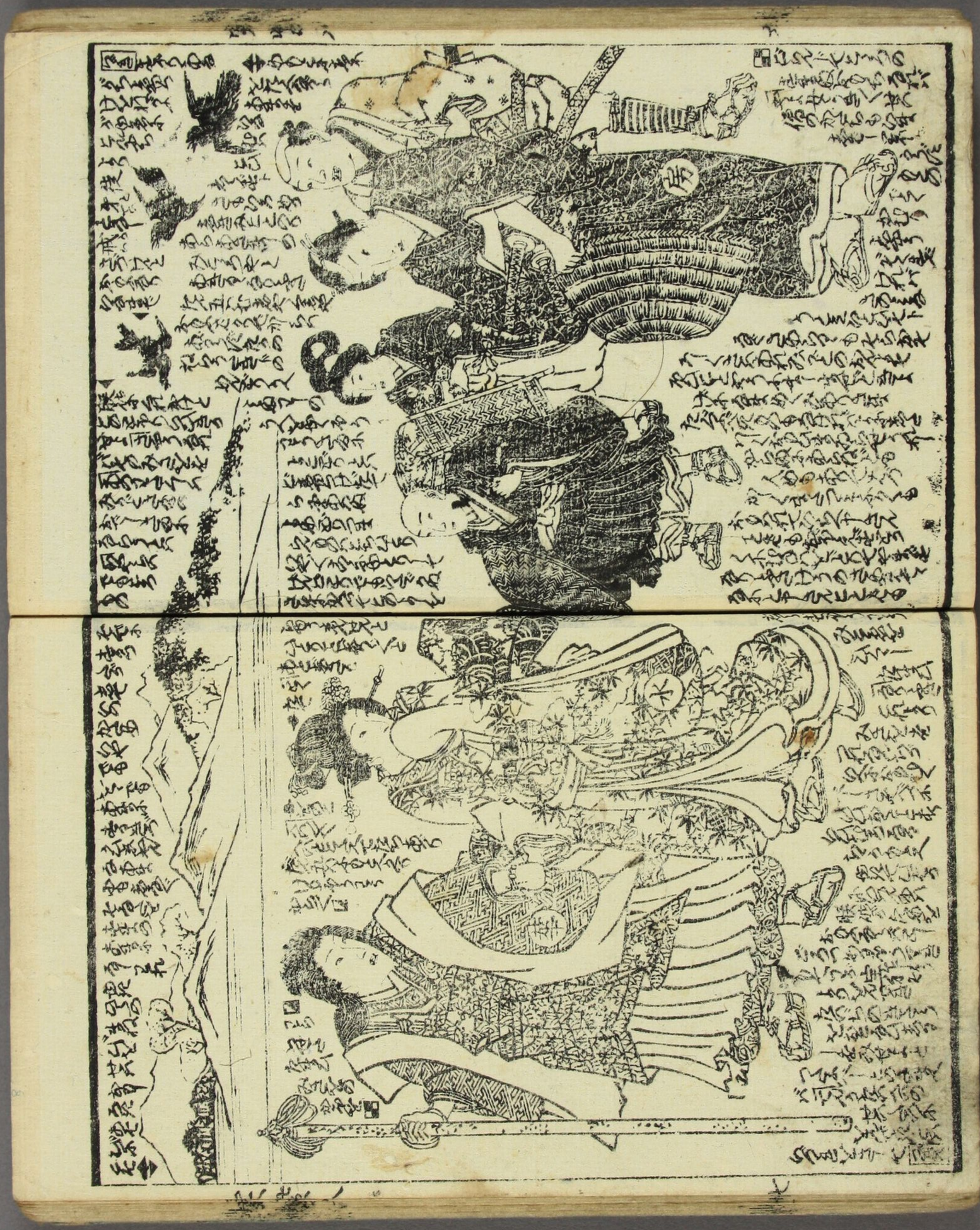
笠亭仙果

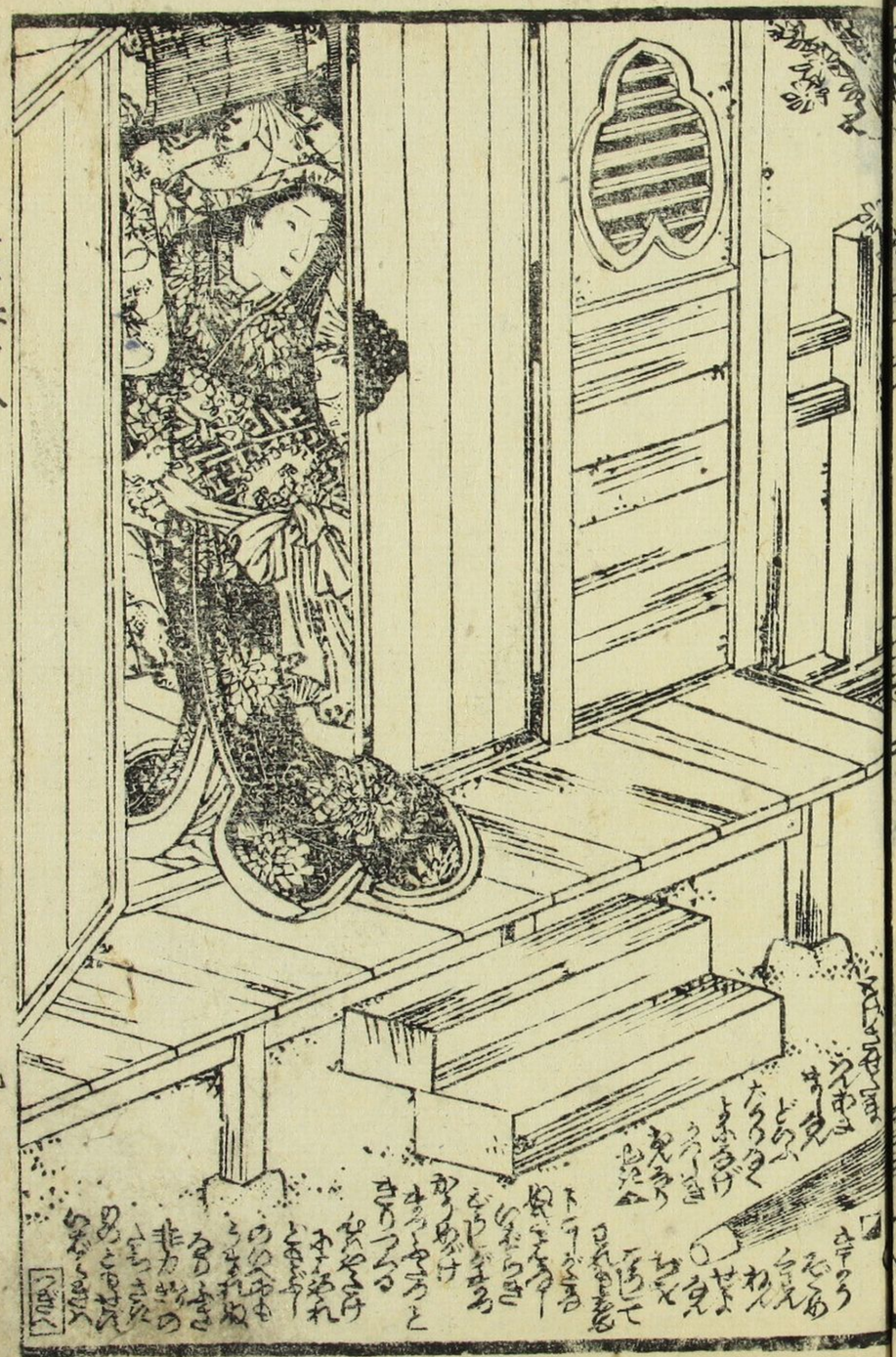


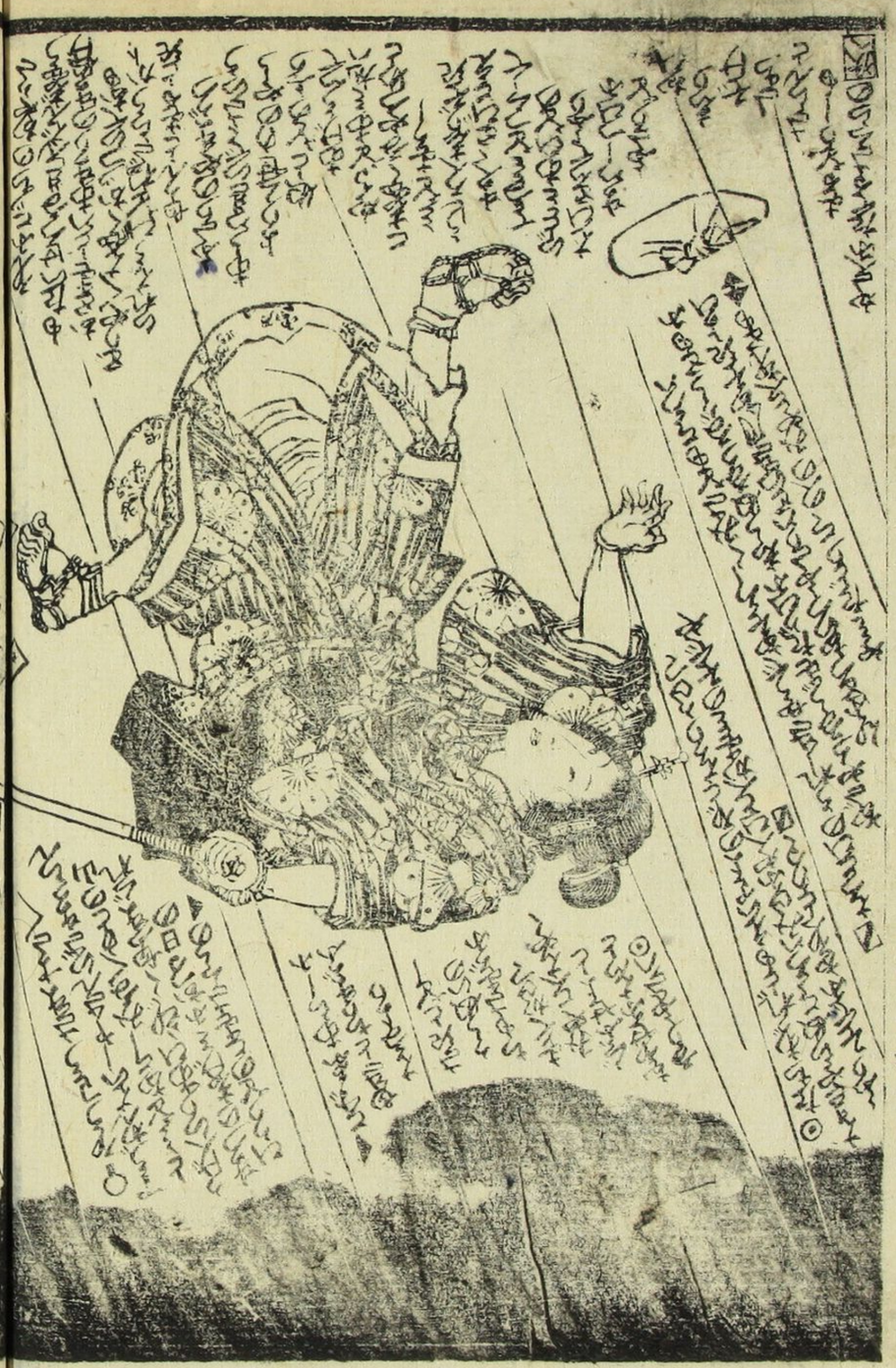

大齋院源氏物語と
御覧ぜる所
齋院より
一条天皇の中宮
に請せ給ひ
命とうけて伝
式部其時源氏
物に著くすと河海
抄に書しあれ齋院紀
にもあれど推量の説の由

内裏

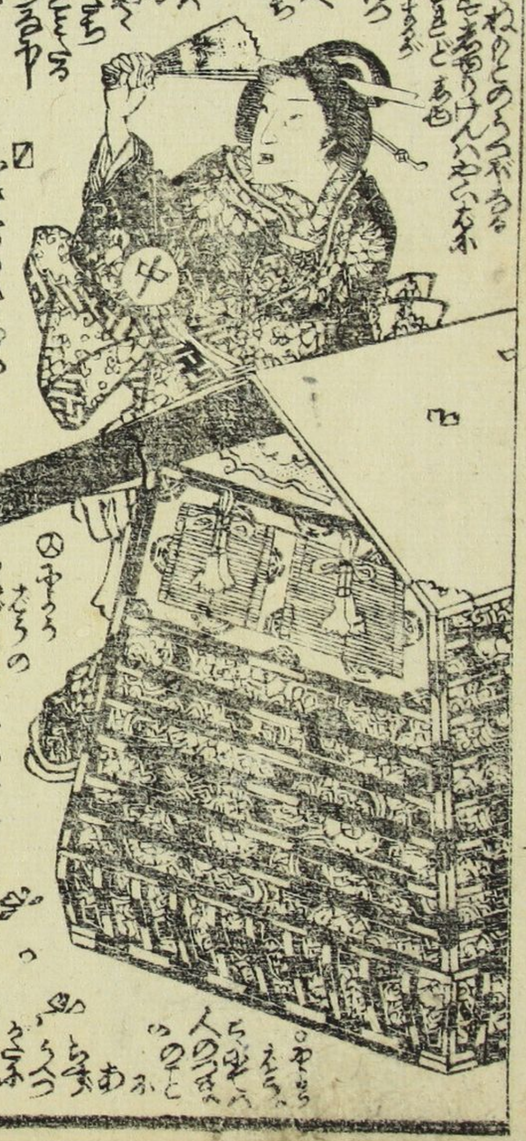


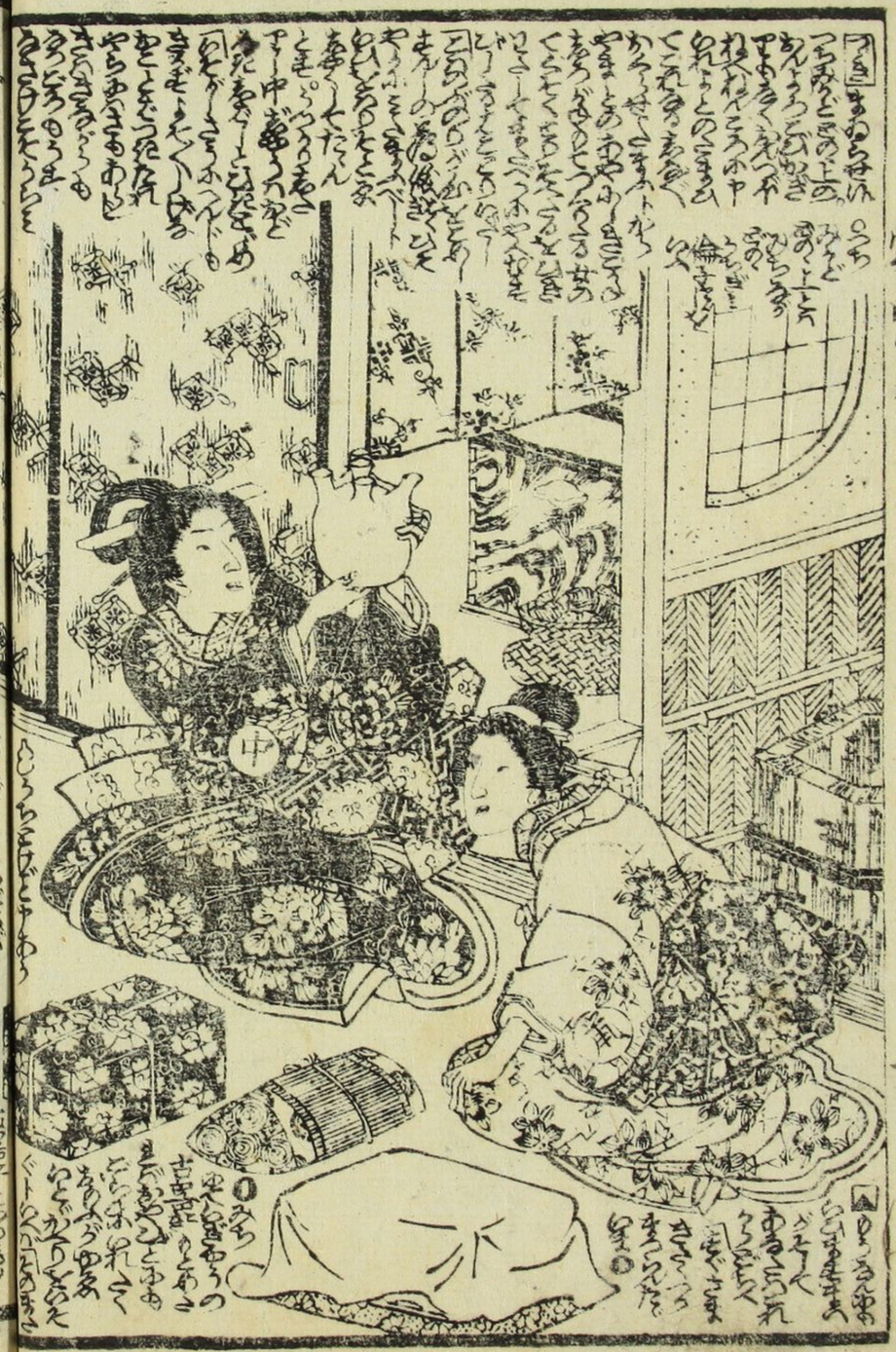


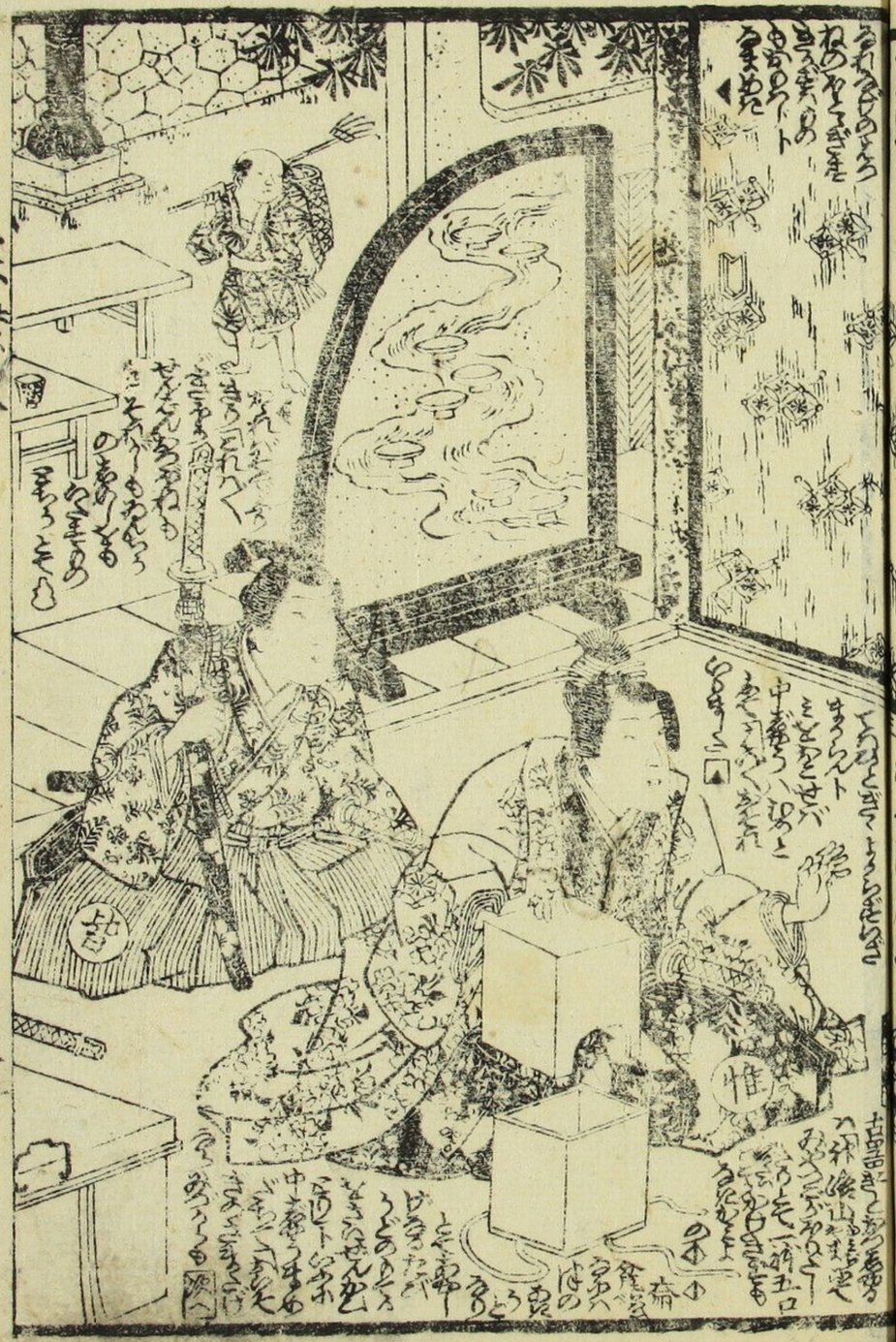


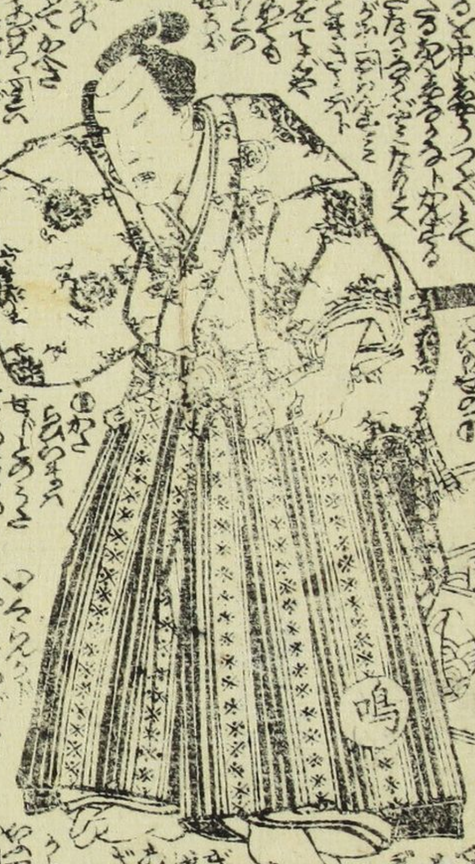


仙果作
國貞画

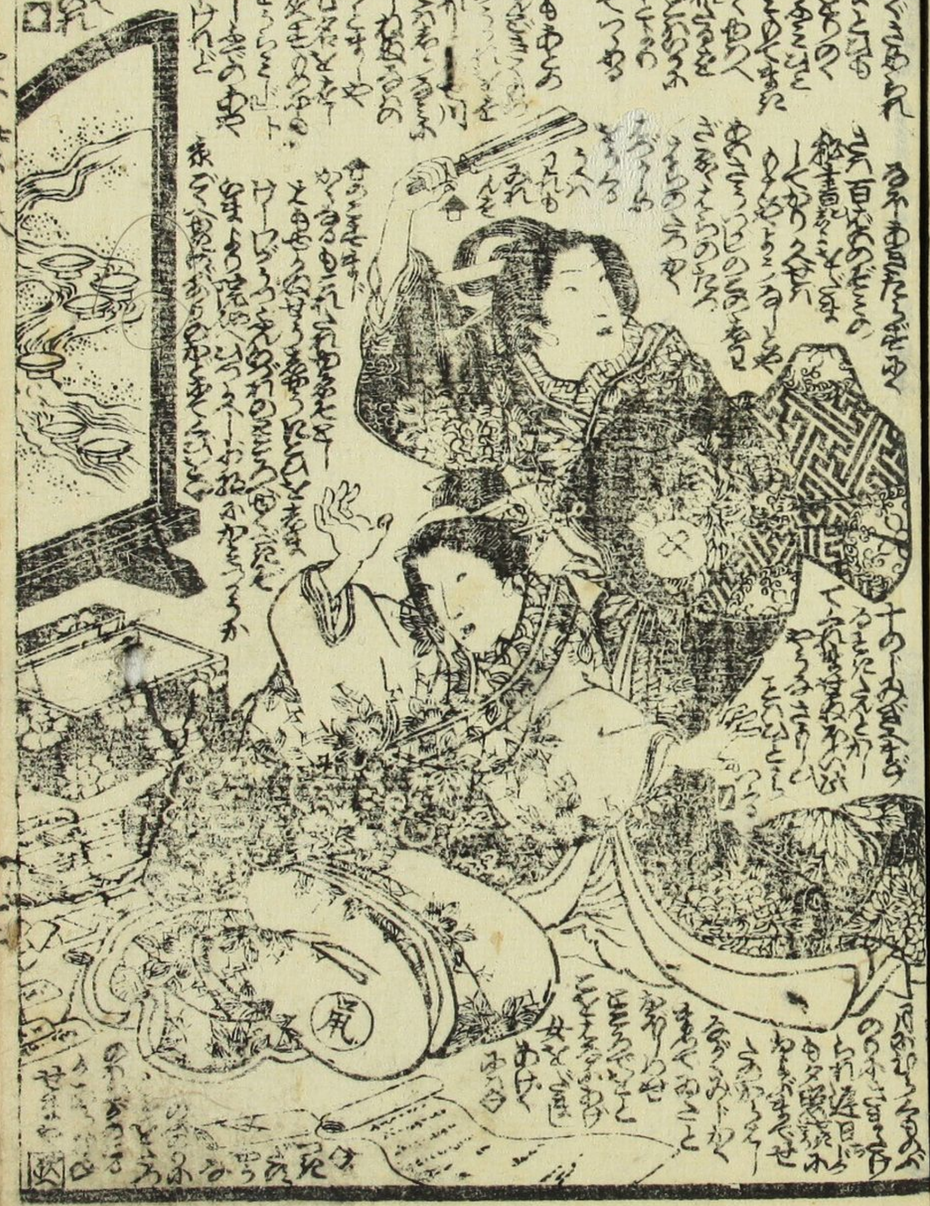




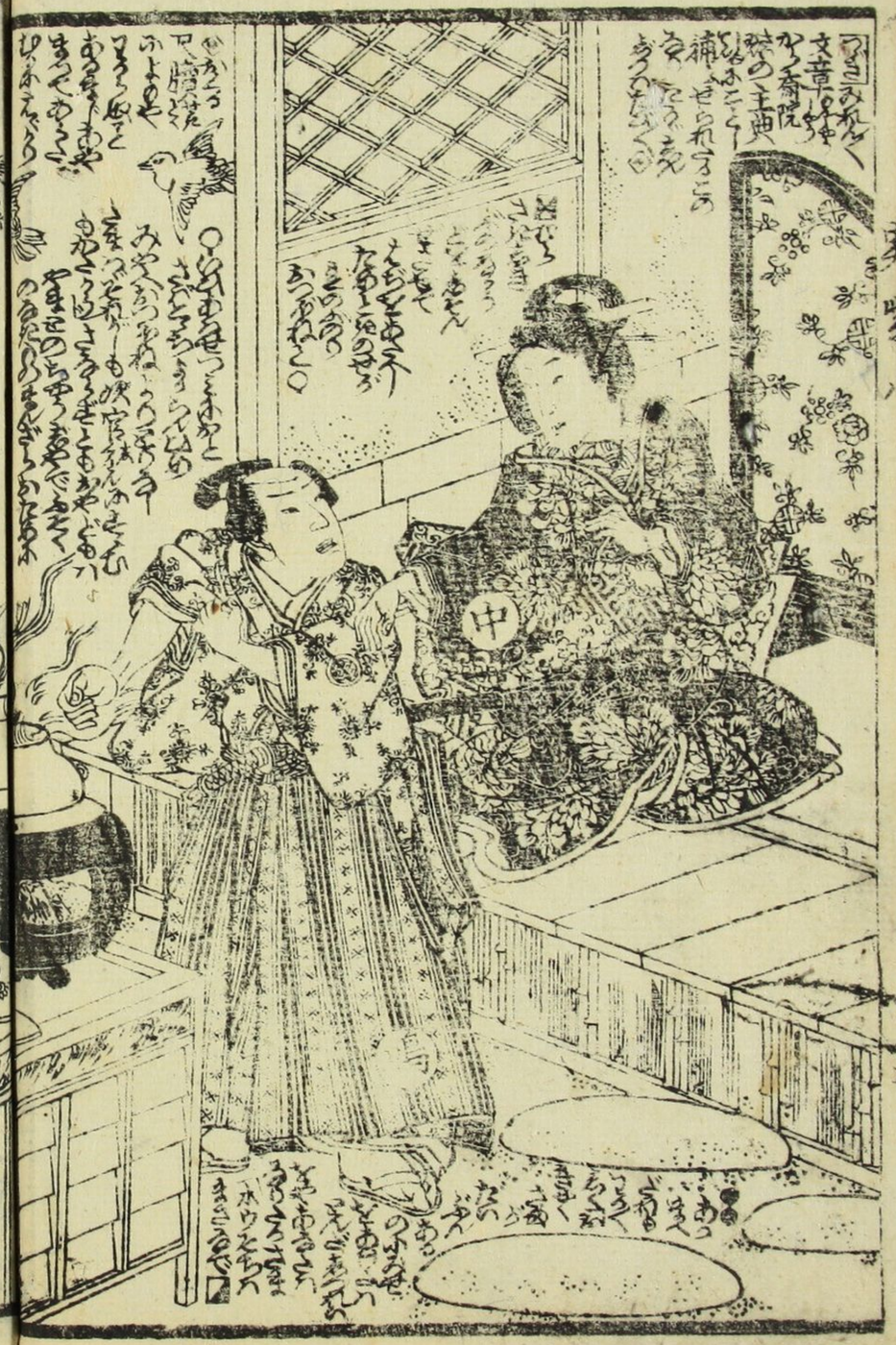


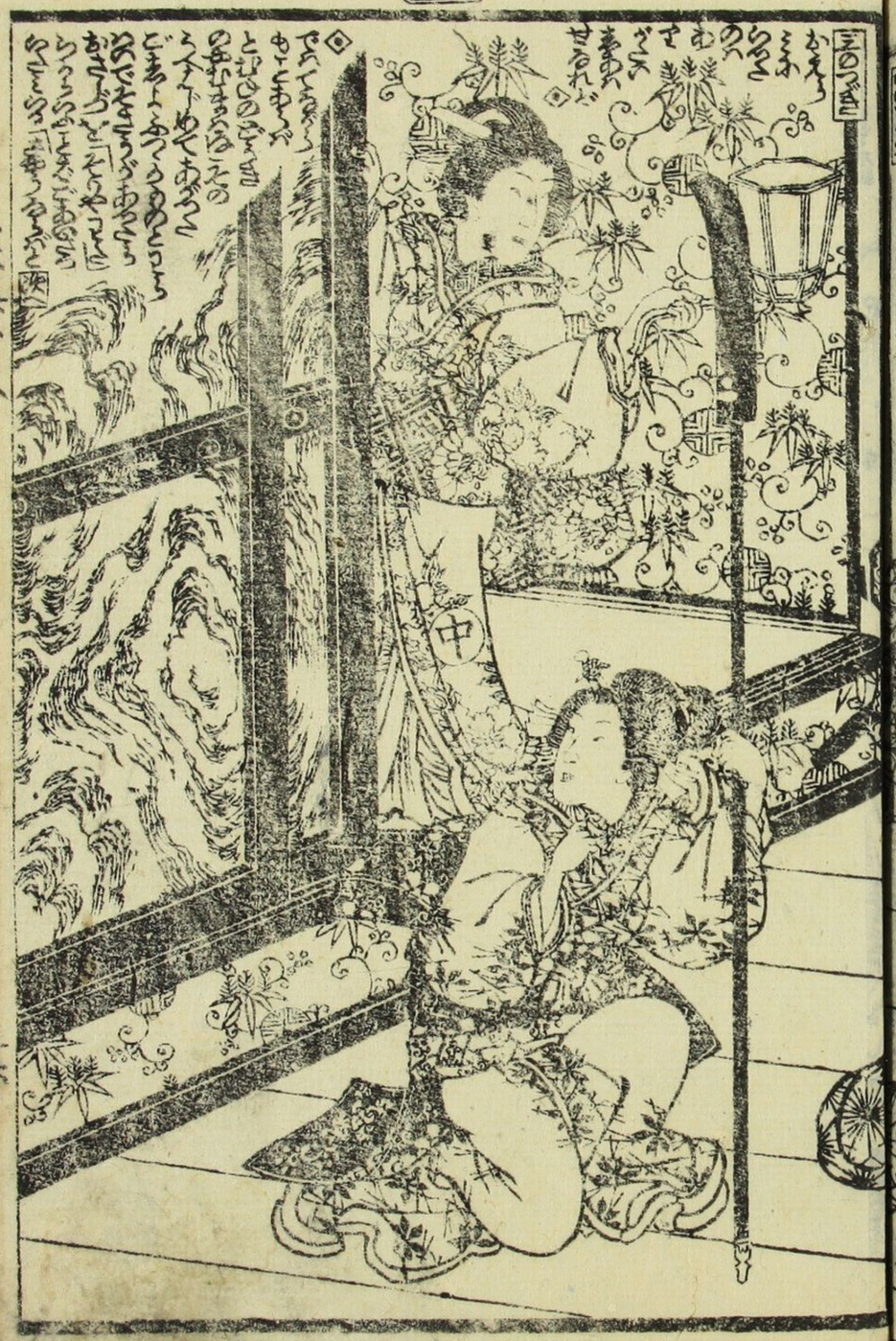


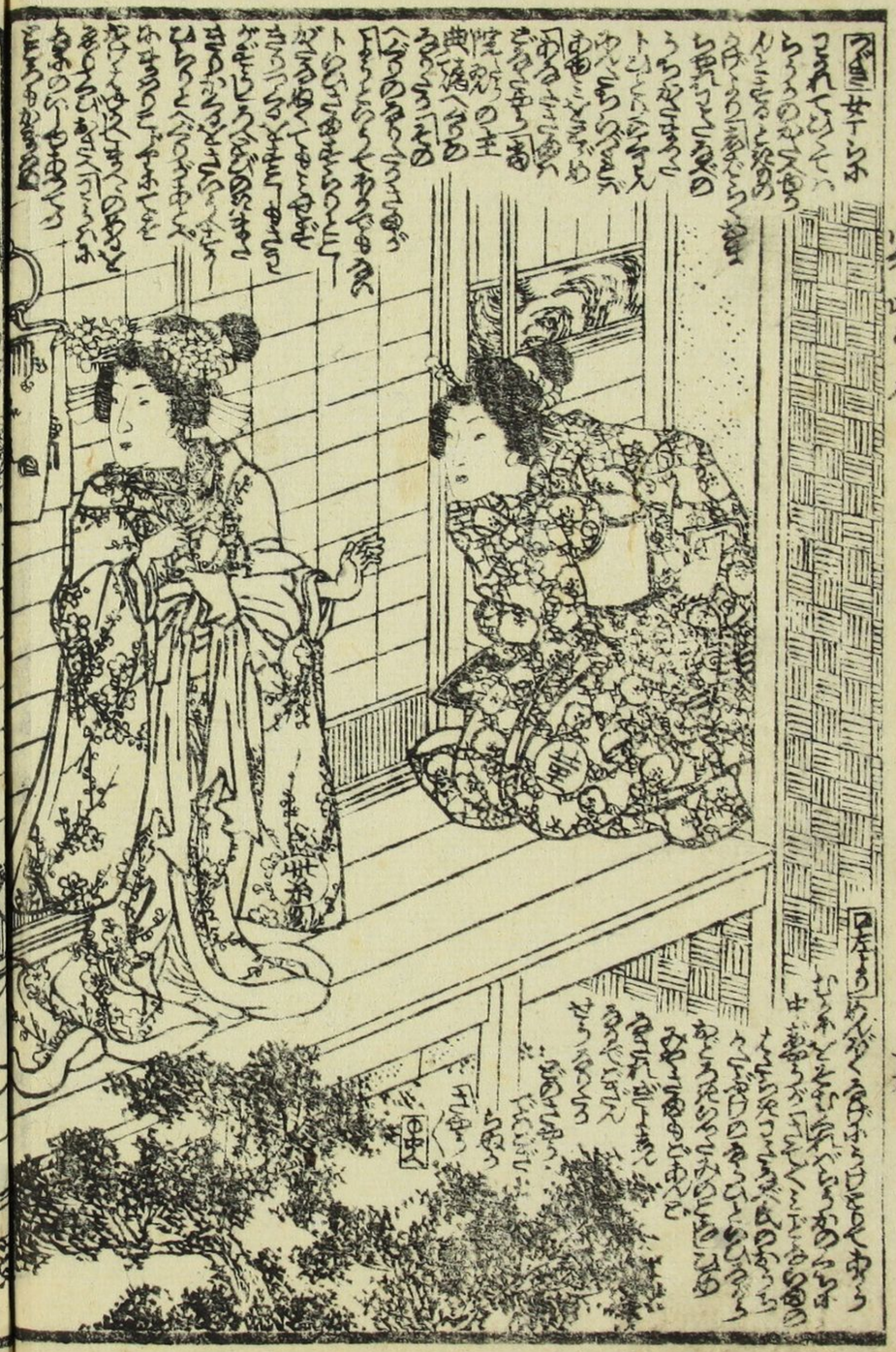
鳴

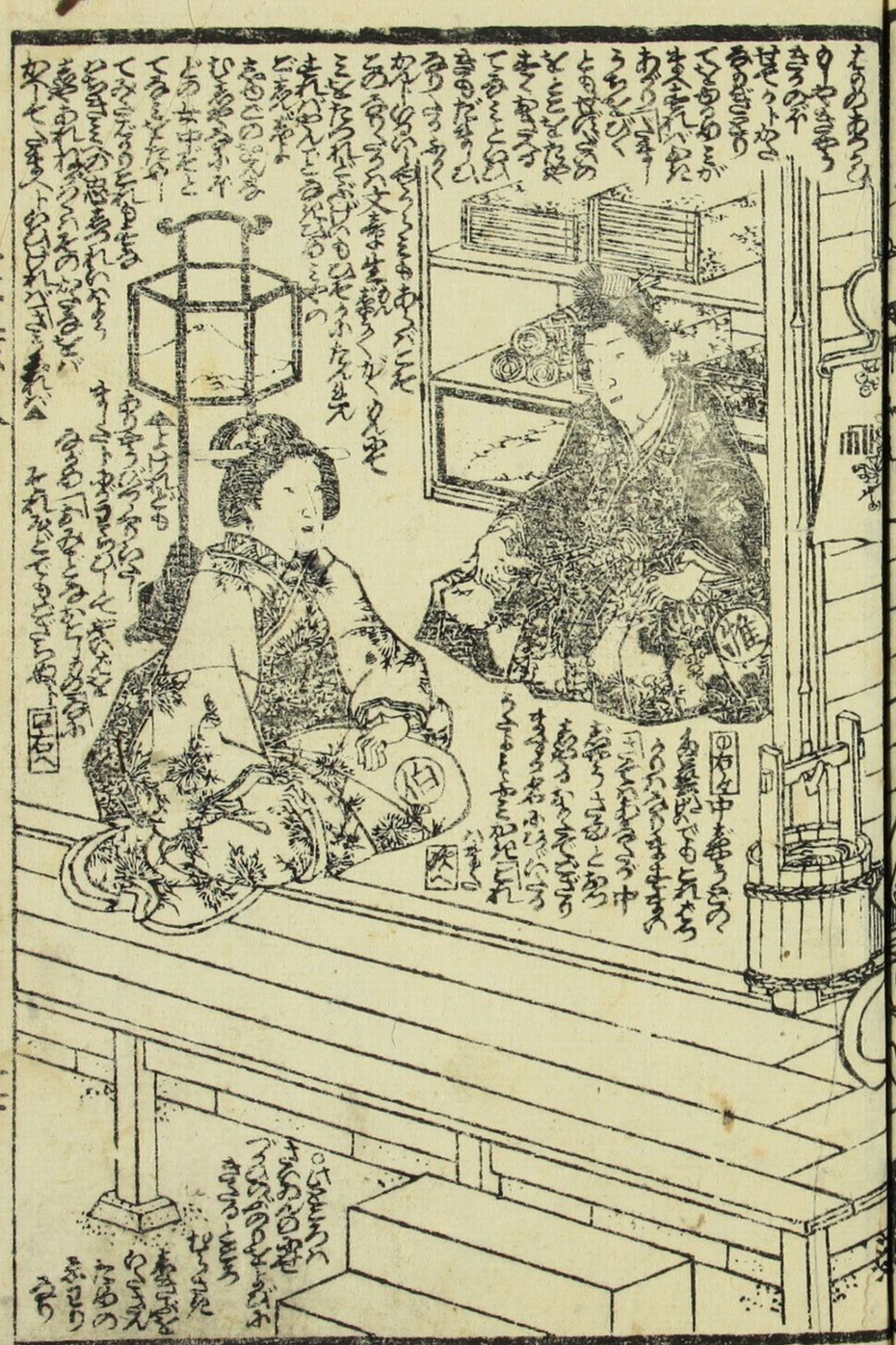


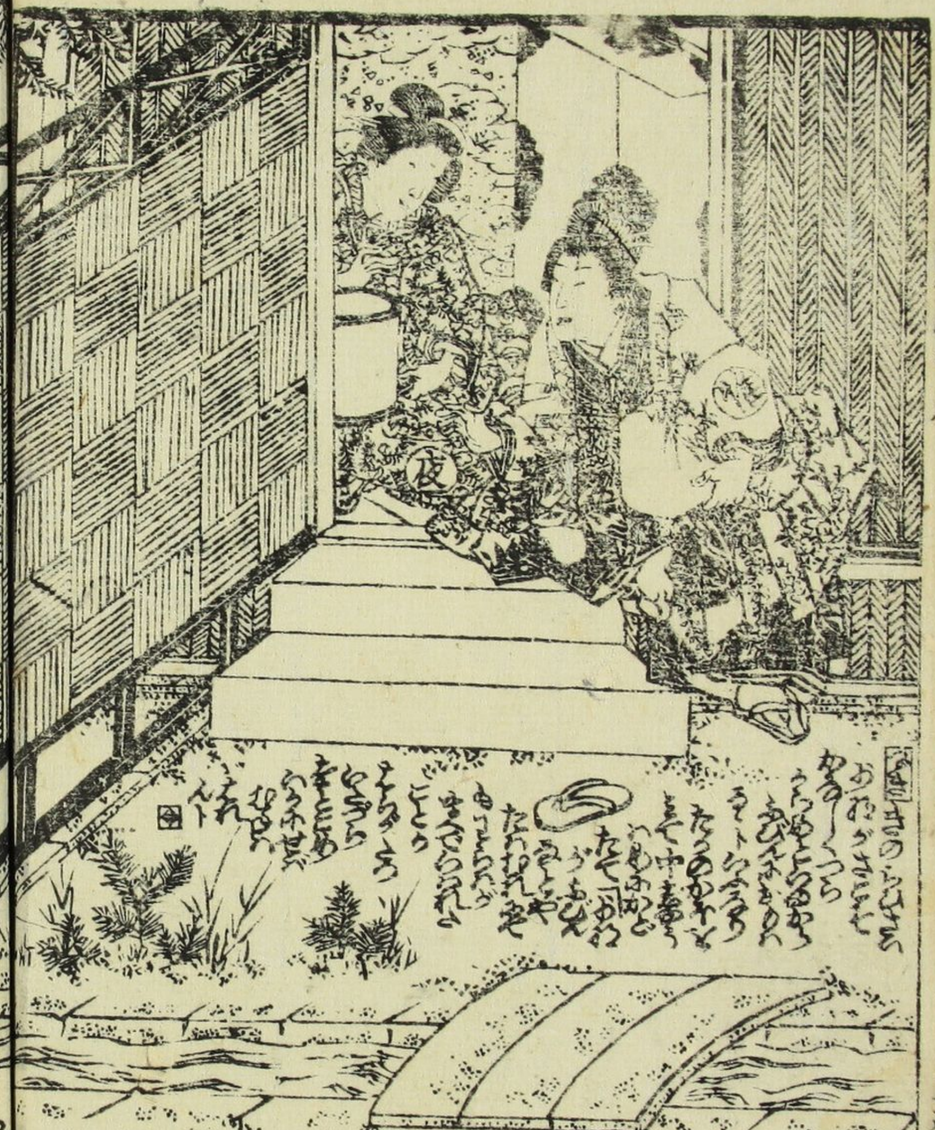
鬼



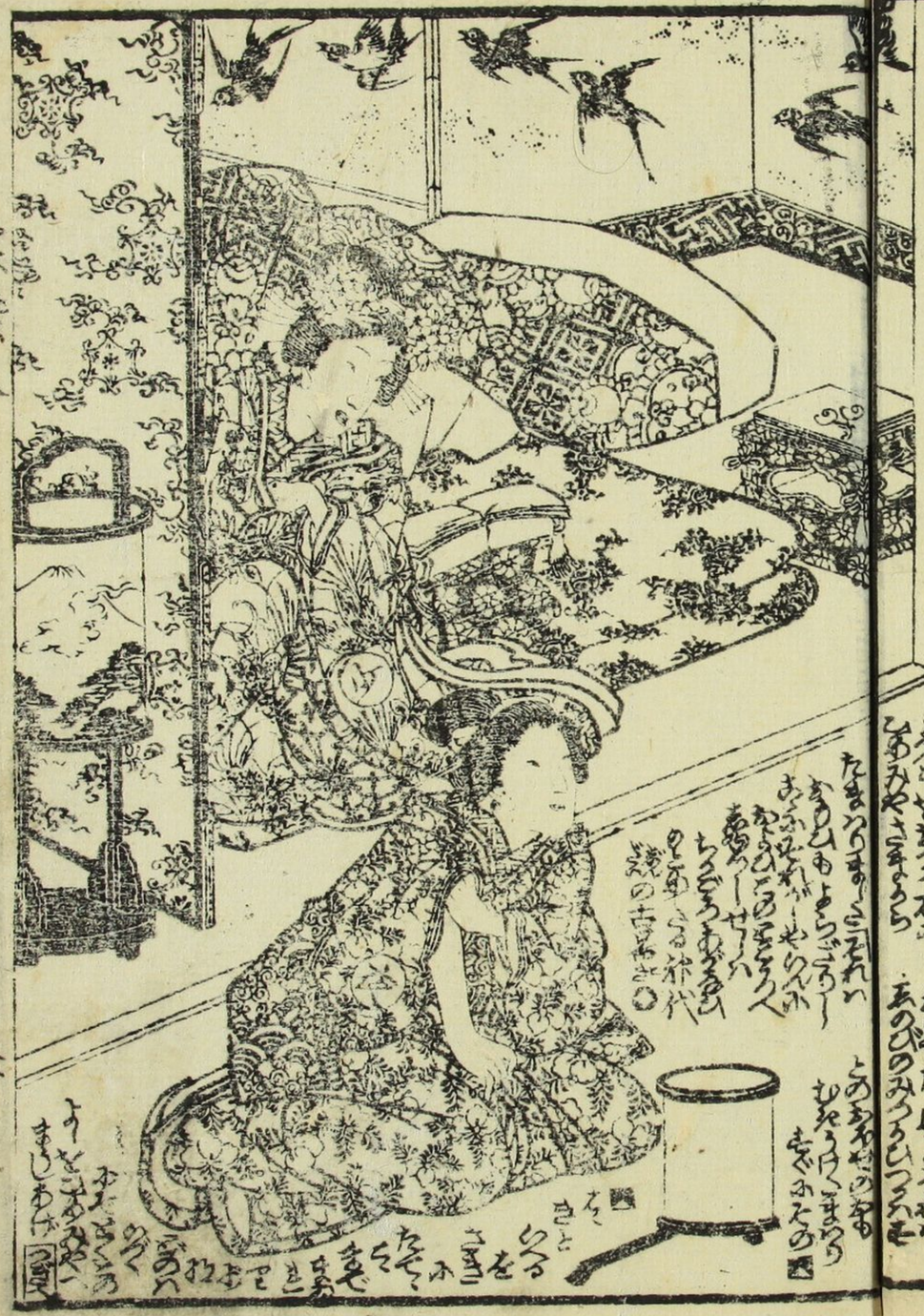


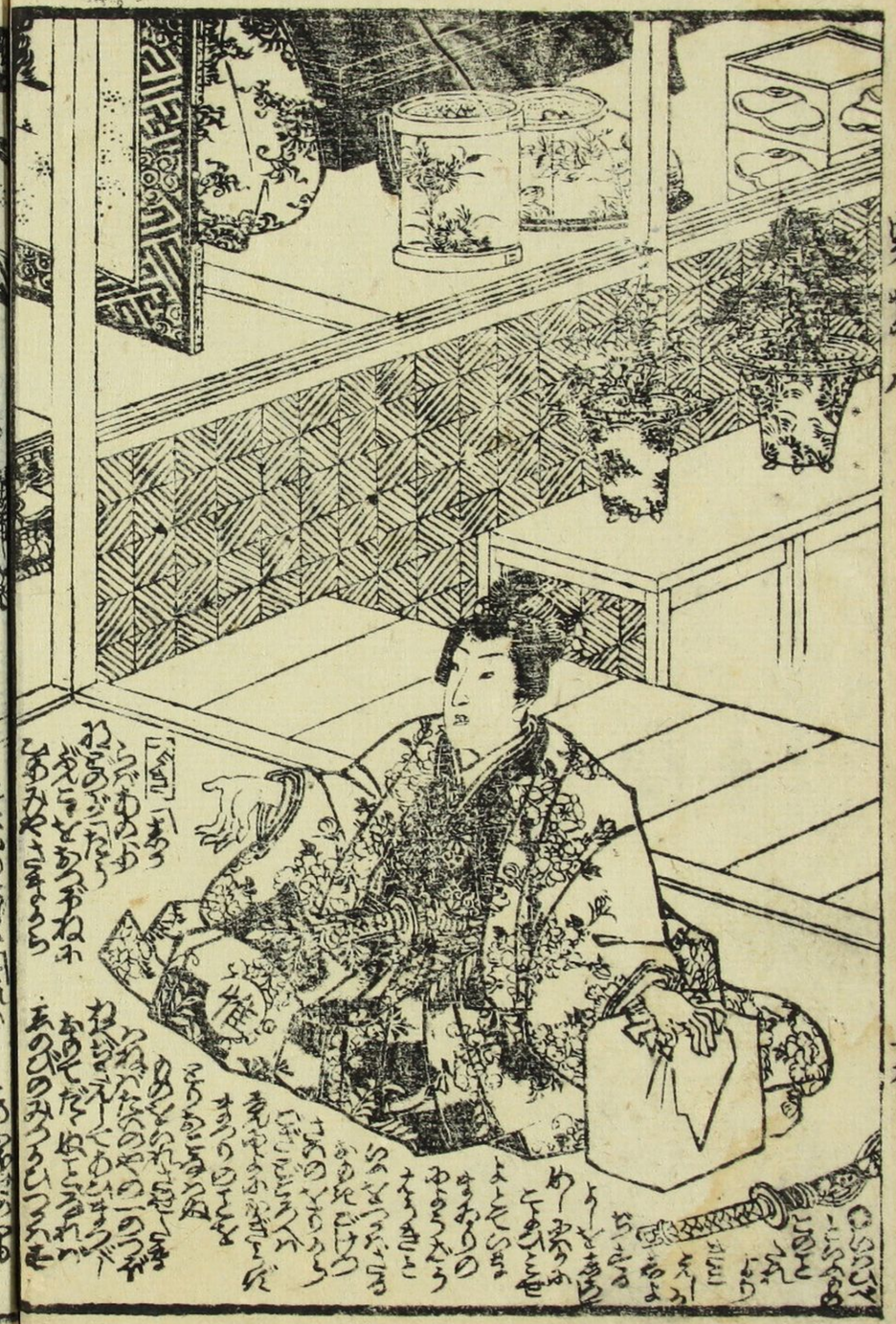






伯





笠亭仙果述 一壽齋國貞画

十返舍 一九作
滑稽道中膝栗毛

柳水亭種清作
不思議塚小説櫻

同
風俗淺間ヶ嶽

關太郎鈴ヶ譚
五篇大尾

柳水亭菊水作
豊時田秋漣新雁
三篇大尾

柳水亭種清作
猛田姉妹新白石
同

出版人 山中喜太郎
京橋区銀座四丁目三番地

曲亭馬琴作

新編金瓶梅全輯

十篇大尾

同

女郎花五色石臺

十篇大尾

同

小女郎蜘怨苧環

三篇大尾

柳下亭種員作

兒雷也豪傑譚

為永春水作

黃金水大盡盃

柳亭種彥作

琴聲美人錄

笠亭仙果作

根源實葉

柳煙亭種久作

假名反古

一休草紙

八冊之内

林惠洋